田辺寺古墳

岡山県阿哲郡大佐町教育委員会

序

我国は，戦後３０年の歩みを経て，経済，社会機構は共に著しい伸張変遷を遂げた社会において，近年富みに問い糺されている課題は，人々の心のふれあい，ふる里見直し，地域の伝統文化再確認などであることは周知のところです。

この度円通寺古墳群の一角が，円通寺墓地整備作業中，偶然にも発見され，埋蔵文化財の適切なる保存処理方を協議し，認可を得て町独自の予算にて古墳の発掘調査並びにこれの復旧に当った次第です。

調査した古墳は千数百年間全く人手にかゝらず，阿新地方では最大規模のものであり，数々の貴重な資料が発掘され，予期以上の成果を成し得たことは同慶に存じています。

発掘調査に当っては，大佐中学校田仲満雄教諭の夏期休業中献身的ご協力とご指導を賜り更には，調査の概要，今後の参考資料を本書に編纂して下さいまして，衷心より敬意を表すると共にその労多しを謝すものです。又地権者円通寺様をはじめ多くの関係者のご協力に対して，深く謝意を表します。

円通寺古墳の発見，調査を契機に文化財の保護啓蒙をはかると共に，本書が古代史研究の一助になれば幸いと存じます。

昭和５３年３月１日

大佐町長

川　添　岩　男

例　　言

1. 本書は，昭和５２年８月１日から２８日まで調査を行なった岡山県阿哲郡大佐町大字永富に所在する「円通寺古墳」の発掘調査報告である。
2. 円通寺古墳の発掘調査の主体者は，大佐町教育委員会池田宏教育長，事務担当は同じく金田与志雄教育次長，福吉幹人社会教育主事，発掘担当は大佐中学校教諭田仲満雄である。
3. 町当局・町教育委員会・町文化財保護委員会からは多大の援助を受け，円通寺児玉裕住職，村上工業村上葆社長には墓地造成に多くの支障を持たらすにもかかわらずご協力をいただいた。また，伊三木喜平，塚本茂夫，本名昭三，杉井邦彦，児玉正の諸氏には，夏の暑いときに直接発掘に協力いただいた。記して謝意を表したい。
4. 本書に用いた標高は，すべて海抜高である。
5. 本書に用いた地形図は，大佐町が国土地理院の承認を得て作成したものを複製したものである。
6. 遺物の整理，報告書作成は田仲が行なった。

題字は大佐町長川添岩男

目　　次

序
例　　言
本　　文
第一章　地理的・歴史的環境 ---- 1
1. 地理的環境 ---- 1
2. 歴史的環境 ---- 2
第二章　発掘調査に至る経過 ---- 5
第三章　発　掘　調　査 ---- 6
1. 古墳の立地 ---- 6
2. 古墳の概要 ---- 6
(1) 墳丘および周溝 ---- 6
(2) 横穴式石室 ---- 7
(3) 埋葬設備および遺物の出土状態 ---- 8
第四章　出　土　遺　物 ---- 13
1. 装　身　具 ---- 13
2. 鉄　　器 ---- 14
3. 須　恵　器 ---- 19
第五章　考　　察 ---- 29
あとがき ---- 30

図　目　次

図1　大佐町内遺跡分布図 ---- 3
図2　円通寺古墳周辺地形図 ---- 5
図3　横穴式石室平面図 ---- 9
図4　横穴式石室排水溝平面図 ---- 10
図5　横穴式石室排水溝平面図（蓋石除去後） ---- 10
図6　棺台および出土遺物配置図 ---- 11
図7　棺台配置図 ---- 11
図8　釘配置図 ---- 12

図　9　遺物配置図 ---------- 12
図10　装身具類実測図 ---------- 13
図11　鉄器実測図 ---------- 15
図12　鉄鏃実測図 ---------- 16
図13　釘実測図1 ---------- 17
図14　釘実測図2 ---------- 18
図15　須恵器実測図1 ---------- 20
図16　須恵器実測図2 ---------- 21
図17　須恵器実測図3 ---------- 22
図18　須恵器実測図4 ---------- 23
図19　須恵器実測図5 ---------- 24

写　真　目　次

写真　1−1　横穴式石室羨道（入口側から） ---------- 31
　　2　横穴式石室袖部（玄室側から） ---------- 31
写真　2−1　玄室奥壁 ---------- 32
　　2　玄室側壁（東側） ---------- 32
写真　3−1　棺台および遺物出土状態 ---------- 33
　　2　棺台および遺物出土状態 ---------- 33
写真　4−1　遺物出土状態 ---------- 34
　　2　遺物出土状態 ---------- 34
写真　5　装身具および鉄器 ---------- 35
写真　6　鏃 ---------- 36
写真　7　釘 ---------- 37
写真　8　須恵器1 ---------- 38
写真　9　須恵器2 ---------- 39
写真10　須恵器3 ---------- 40
写真11　須恵器4 ---------- 41
写真12　須恵器5 ---------- 42
写真13　須恵器6 ---------- 43
写真14　須恵器7 ---------- 44

第一章　地理的・歴史的環境

1　地理的環境

岡山県阿哲郡大佐町は，岡山県の西北部にあり，西は新見市と，北は鳥取県と，東は岡山県真庭郡（旧美作国）と，南は岡山県上房郡とその境を接していて，南北２１㎞，東西１０㎞と南北に長い町で，全町面積１２２㎢，山林１０８㎢，水田4.4㎢の山村である。一級河川高梁川の一支流小坂部川の水源地帯となっている。小坂部川は，鳥取県境にその端を発し，諸所の谷水を集めて小坂部に至り，刑部低地（沖積平地）を形成し，布瀬を通り，さらに南に流れて美穀（ミヨン）湖（人工湖）を経て，新見市唐松にて本流の高梁川に合流する。大佐町における水田は，刑部低地に南北２㎞，東西１㎞のまとまりが見られるのみで，その他の大部分は谷水田あるいは小坂部川沿いの狭い水田が散在している。水田は狭いが，牧畜・林業がさかんで，牛は特に大佐牛と呼ばれ，この牛の碁盤乗りは有名である。

大佐町の南半は，吉備高原の北端となっていてその標高は５００～６００ｍを測り，吉備高原を開折してできた小さな谷が発達しており，この部分が谷水田として利用されている。また，北半は中国山地の南端部を形成していて，標高1152.8ｍの雄山（オンゼン）など１０００ｍを越える山もいくつかみられ，急しゅんな地形を呈している。刑部低地から田治部にかけては，第三紀の舌状の丘陵がよく発達している。礫まじり黄褐色土の第三紀層の上に第四紀の粘土化の進んだ黄色火山灰が堆積しており，その上を”黒ボコ„と呼ばれる黒色火山灰土がおおっている。この黒ボコが現地表面を形成しているが，いわゆる火山噴火に伴なって降下したままの火山灰と，降下した火山灰が風によって舞い上がり再堆積したものとがあるがその色別は非常に困難である。大佐町を含めて新見・阿哲地方に一般的に見られる”黒ボコ„がどの火山の噴火に由来したものであるかは，現在のところ研究が進んでいない。第四紀（特に洪積世）の粘土化の進んだ黄色火山灰の研究も岡山県ではその緒についたところであるが，岡山県阿哲郡神郷町野原遺跡では，黄色火山灰土層の中から後期旧石器時代の遺物が出土している（注１）ので，大佐町内における黄色火山灰土層も今後注目すべきものの一つであろう。

集落遺跡は，舌状丘陵上，その縁辺部あるいは刑部低地内の微高地上に見られ，現在の集部の多くは，その丘陵の縁辺部に位置している。

また，刑部低地の縁辺部には，小坂部川によって形成された２～３段の小段丘がみられ，この段丘上に現在の集落が載っている（注２）。

注１　「野原Ａ地点発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告７』（岡山県教育委員会 1972年刊）

注２　大佐町の地形・地質については，滝田澄正「大佐町の地質・地形」『大佐町誌』（大佐町１９７９年刊）にくわしく記述してあるので参照されたい。

2　歴史的環境

歴史的環境は，大佐町内遺跡分布図（図２）を参照しながら，時代の古い順に概観していくことにした。

旧石器時代の遺跡・遺物は，現在のところまったく確認されていない。しかし，阿哲郡神郷町野原遺跡で，この時代の遺物が出土しているので，大佐町内でも今後発見される可能性は充分にあるといえよう。

縄文時代の遺物は，君山の円山遺跡（１）・田治部の戸谷遺跡（２)(注１）・永富の大寺遺跡(3)の３個所において各１片の縄文式土器片が採集されているが，遺構は確認されていない。縄文時代の人々がこの地に足を踏み入れていたことを示す材料である。旧石器時代のものと同様今後その数を増していくであろう。

弥生時代では，中期前半以前のものは確認されていないが，大寺遺跡において中期後半の土器片が数片採集されている。水稲耕作をやっていた弥生時代人が，この時期に大佐の地に入ってきて，谷水田を利用しながら定住していったものであろう。

弥生時代中期の遺跡は，現在１個所が知られているのみであるが，後期になるとその数も増して，千谷の脇遺跡（４）・永富の円通寺遺跡（５）・同じく塚の元遺跡（大佐中学校校庭内）（６）・天神山遺跡（７）・小南の小南遺跡（８）などかなりの数にのぼる。脇遺跡では磨製石庖丁が採集されており（中期の遺跡との複合も考えられる），円通寺遺跡では，特殊壷（特殊器台に伴うもの）（注２）に類似した小型直口壷片が採集されていて，集落址だけでなく墳墓の存在も予想される遺跡である。多くが舌状丘陵上にあるのに対して，塚の元遺跡や矢作（ヤハギ）遺跡（９）は刑部低地内の微高地（自然堤防）上に形成されている。丘陵上のものと自然堤防上のものとの間には時期差も考えられるが，それを裏づけるには現在のところ資料が充分ではない。

古墳時代の集落は，現在の集落と重なるためか１例も確認されていない。この時代の墳墓である古墳はいずれも後期に属するものばかりで，前期の古墳は１基も発見されていない。後期の古墳は，横穴式石室墳を主体とするもので，焼田山古墳群（１０）・大山古墳群（１１）・漆原古墳群（１２）などは４～１１基が群集している。これに対して，円通寺古墳（１３）・神諾古墳（１４）・脇古墳（１５）・塚の元古墳群などは１～２基で存在している。これらは単独もしくは２基のまとまりであるが，本来は数基の群集墳であったと考えられる。

これらの古墳は，群集してあるいは単独で存在し，いずれも小規模であるが，その中にあって円通寺古墳は，新見・阿哲地方では最大級の横穴式石室を有するものである。永富に，新見・阿哲地方屈指の豪族の存在を予想することも容易である。

奈良時代の遺跡は，戸谷遺跡（２）が知られている。この遺跡は，中国縦貫自動車道大佐サービスエリア建設に伴なって調査されたもので，隅丸方形の住居址１軒が確認されただけである。この遺跡は，大佐町南端にあって西にのびる舌状丘陵の南斜面に位置している。この時代の遺跡・遺物は，戸谷以外では確認されていない。

平安時代の遺跡・遺物は現在のところ確認されていない。

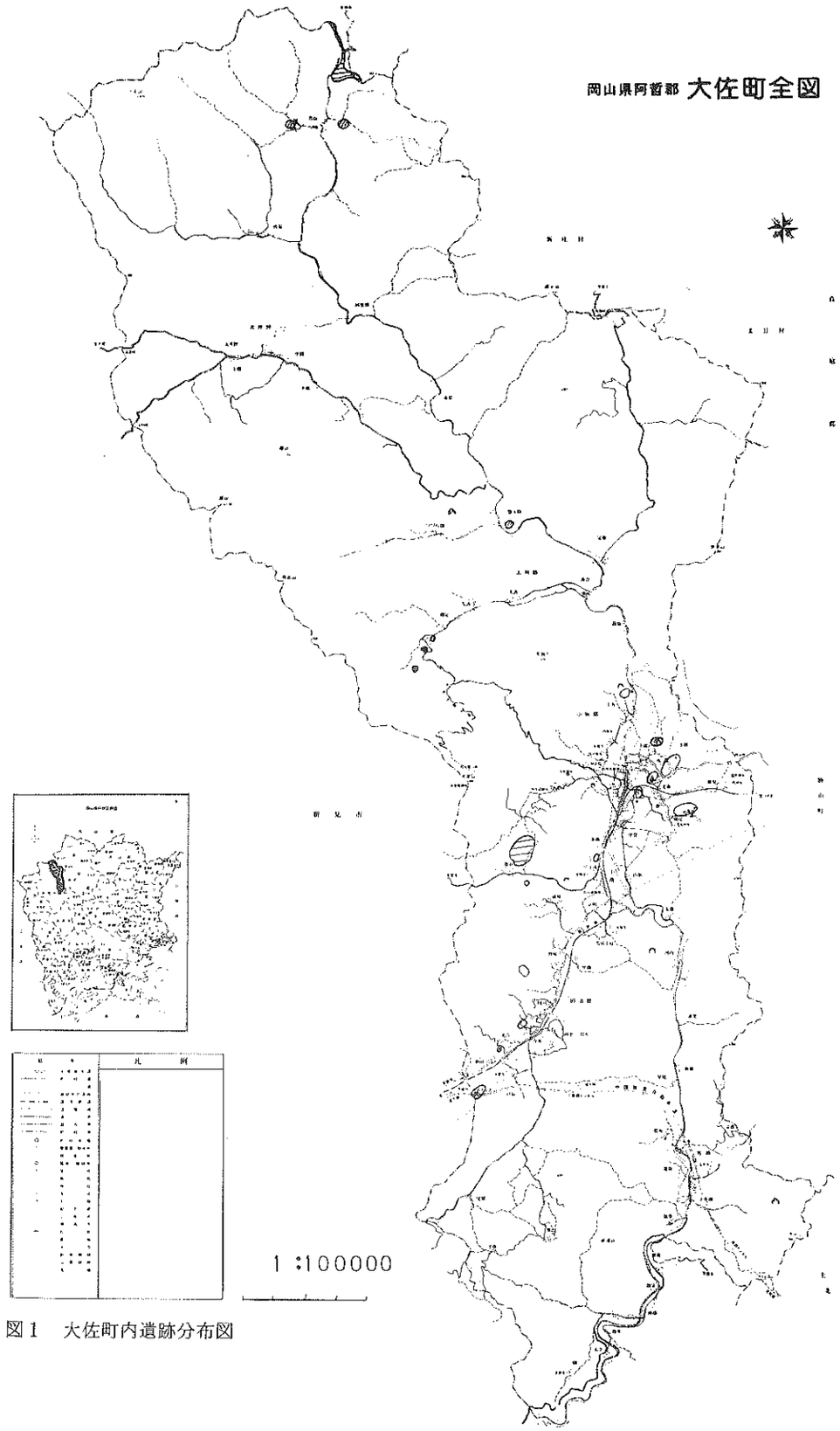


図１　大佐町内遺跡分布図

鎌倉時代の遺物を出す遺跡として，大寺遺跡をあげることができよう。遺構は確認されていないが，備中南部の亀山で焼かれた亀山焼の壷の破片がかなり出土している。骨蔵器として利用したものであろう。

鎌倉時代以後の中世と呼ばれる時代は，この地も戦国の波にさらされ，各地にその遺跡を城址という形で残している。北から葛畑（ツヅラハタ）城址（１６）・割亀城址（１７）・矢作城址（１８）・円通寺城址（１９）・周防城址（２０）・安本城址（２１）・大山城址（２２）などをあげることができる。矢作城址を除いて，他の城址は山上あるいは尾根上にあるが，矢作城址は小阪部川の自然堤防上に築城されたもので，一種の「沼城」といえよう。

製鉄関係の遺跡は，鉄穴井手・鉄穴場・たたら場など多くのものが各地に散布している。鳥取県境近くにある大井野の大鉄穴遺跡（23）では，東西８０ｍ・南北１５０ｍの鉄穴場に２本の水路を付設しており，西からの１本は水口から切り端まで延長３５０ｍで途中２個所に池をつくっており，東からの１本は途中の山腹にトンネルを掘って水路をつないでいる。２本の水路は共にその水口は，伯耆の国に位置している。伯耆の人がやって来て稼働したという口碑をうらづけるものであろう。製鉄遺跡の多くは，未だ山中に埋もれたままといえよう。製鉄遺跡のほとんどは江戸時代のものであろう（注３）。

注１　橋本惣司　「戸谷遺跡」　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告１１』　岡山県教育委員会（１９７６年刊）

注２　正岡睦夫・二宮治夫・田仲満雄　「西江遺跡」　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告２０』　岡山県教育委員会（１９７７年刊）

注３　大佐町誌編纂委員会　『大佐町誌』　大佐町（１９７９年刊）

第二章　発掘調査に至る経過

この円通寺古墳は，昭和５２年５月までは，その存在がまったく知られていなかったものである。真言宗普永山円通寺が，同寺の東にある墓地の拡張を行なっている時に，偶然５個の須恵器（４個は平瓶の完形品，１個は大甕破片）が掘り出され，それらはその翌日に，塚本茂夫大佐町文化財保護委員の手によって大佐町立大佐中学校に持ちこまれた。ただちに現地調査を行なった結果，横穴式石室を内部主体とする古墳が１基存在し，石室入口部の一部が破壊されその部分から須恵器が出土したものと判明し，墳丘については，墳丘上部に墓地の造成のための土砂がすでに置かれていてほぼ造成が完了しており，墳丘の形・大きさを知ることが困難な状態であった。墓地造成工事でこれ以上古墳を破壊しないように依頼し，岡山県教育委員会文化課へ工事中に古墳が発見された由を連絡した。その後，文化課職員も来町して現地視察し，文化課・町教委・地主・施工業者・町文化財保護委員等で協議し，現状のまま保存することとなった。

その後，墓地造成が完了し，その墓地への埋葬が行なわれると永久に日の目を見ないまま埋もれてしまい調査は今後一切不可能となるので，埋葬の行なわれていない現時点で調査を行ない，資料を今後有効に活用しようという考え方が町当局の中にでてきた。

発掘調査に要する経費は，町予算でまかなわれることになり，その経理は町教育委員会社会教育課で行ない，発掘調査は田仲が担当することになり，調査は昭和５２年８月に行なわれた。

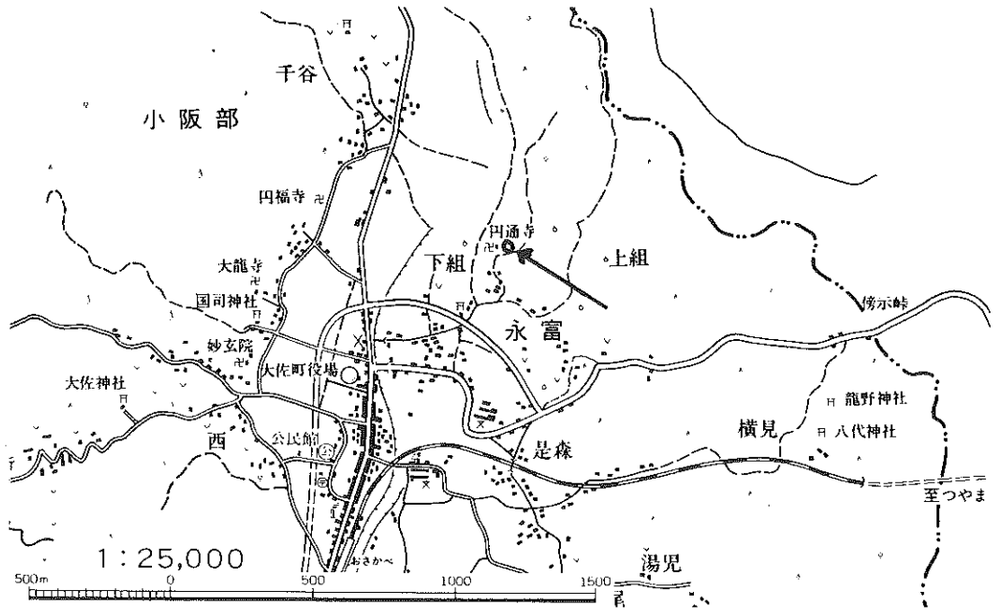


図２　円通寺古墳付近地形図（→印の先の○が円通寺古墳）

第三章　発　掘　調　査

発掘調査は，昭和５２年８月１日から２６日まで実施した。調査は，墓地造成の既完の部分についてはできるだけ造成部分をこわさないように調査を進めることになり，羨道入口部分から調査を始めたが，羨道巾があまり広くなく作業能力も悪く，石室のほぼ中央の上部にトレンチを石室の長軸に平行に設けて，そのトレンチ掘り下げを行なった。石室には天井石が載っていると予想していたが，一枚の天井石も残存していなくて，結局，石室内全体の埋土を除去するという方法を取らざるを得なくなった。

1　古墳の立地

刑部低地は，南北3.5㎞・東西１㎞の細長い平地をつくっている（この平地は大佐町内では最大の水田地帯である）。この刑部低地の東側には，第三紀層からなる低い丘陵が南西あるいは西方向に多くのびている。これらの丘陵上には，弥生時代の集落址や古墳時代の群集墳などがつくられている。これら低丘陵の内，最北端に位置している丘陵上に当古墳が存在する。

円通寺古墳の存在する低丘陵は，北北東から南南東にのびており，水田面からの比高は４０ｍを測る。この低丘陵西斜面の麓には円通寺が建てられている。また，丘陵の西斜面には，円通寺の境内に続いて墓地がつくられている。この墓地の上方の斜面中腹に新しく墓地を造成中に当古墳が発見された。したがって，この古墳は，南々東にのびる低丘陵西斜面中腹に位置している。

この丘陵は，弥生時代後期に集落として利用され（墓地造成中に住居址・貯蔵穴の断面が発見されており，土器片も墓地の中でかなり採集されている），古墳時代後期になると横穴式石室を主体とする古墳群（当古墳の北の松林の中にも横穴式石室をもつ古墳が発見されている）がつくられ，戦国時代になると丘陵頂部に円通寺城が築かれた。円通寺城の築城工事，その後の墓地造成のため丘陵全体は，本来の姿でなく，人工の力が加わり，かなり形を変えている。

2　古墳の概要

(1)　墳丘および周湟

この古墳の墳丘および周湟については，発見当時すでに墓地の造成がほぼ完了していたので，さだかではないが，工事による断面に出ていた周湟の断面の観察などから墳丘の径は約１５ｍ位であったと思われ，巾1.3～1.5ｍの周湟がめぐっていたといえる。墳丘は，横穴式石室の天井石が失くなったことと合わせて斜面のために封土はかなり流失している。工事前には，若干の封土の高みがみられ

たであろう。周湟も造成のため，その全様ははっきりしないが，横穴式石室の南々東の部分の周湟底には，須恵器の大甕片がかたまって存在していた。これは埋葬に伴なう葬送儀礼の一部として大甕が運ばれ，この場所で打ち壊されたものであろう。周湟内の大甕出土例は，英田郡美作町の狼谷遺跡（注１）や新見市の横見古墳（注２）などに知られている。

注１　二宮治夫・松本和男　「狼谷遺跡」　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７』　岡山県教育委員会（１９７５年刊）

注２　岡田博・浅倉秀昭　「横見古墳」　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告１５』　岡山県教育委員会（１９７７年刊）

(2)　横穴式石室

円通寺古墳の内部主体である横穴式石室は，既成の墓地及び今回の墓地の造成工事によって，羨道の入口（羨門部）が破壊されていた。石室の現存長は6.0ｍであるが，遺物の出土状態から見てその長さは７ｍ以上あったものと推測できる。

石室は，斜面に床が平らになるように馬蹄形に掘り込み，その中に構築されている。この掘り込みは，奥半分は第三紀層の黄色粘土に達しているが，手前半分は黒色火山灰堆積層を削っているのみである。

石室の石材は，長さが８０～１３０㎝のかなり大型の石を根石に利用し，石材の最も広い面をもって側壁をつくりあげている。石室の大きさは，玄室の奥巾2.４０ｍ・長さ2.９０ｍ・高さ（現存）1.８０ｍ・玄門部巾2.２０ｍ，羨道の玄門部巾1.６５ｍ・現存入口巾1.１０ｍ・現存長3.0ｍ・現存高1.２０ｍを測り，玄門部には，0.４ｍ×0.６ｍで高さ0.８ｍの石を立てて玄門部を構成しており，石室は右片袖となっている。なお，天井石は一枚も残存せず，また，現存入口の外にも完形の須恵器が出土しているので羨道は１ｍ以上長かったと推定できる。天井石は，円通寺の庭石などとして利用されたものであろう。

石室の主軸方向は，Ｎ－８°－Ｅ方向を示している。

玄室床面には１条の石蓋排水溝がつくられている。玄室の東北隅に地下水の浸み込みがみられ，特に降雨後は多くなる傾向が認められる。この地下水を排水するため溝を東北隅から奥壁沿いに７０㎝西へ寄せ，ほぼ直角に曲がりＳ－１５°－Ｗ方向に1.３５ｍ延び，その地点から少し曲がってＳ－60°Ｗ方向に0.８０ｍ延び，再び曲がってＳ－１０°－Ｗ方向に1.１０ｍに延びて，溝はなくなっている。この地点は石室床面の第三紀黄色粘土層が黒色火山灰堆積土層に変る場所であり，黒色火山灰堆積土になってからは床面は約１０㎝低くなっている。溝の巾は２３～３５㎝・深さは３～１６㎝・底の巾は１２～１５㎝を測る。この溝には，奥壁から３８㎝のところから溝の南端から２０㎝のところまで，概ね板状の石を並べて蓋としており，溝巾より長い石については床へたたき込んでいて，蓋石の上端が床面とほぼ同一レベルになるように蓋石を置いている。埋葬当時は，溝の中・蓋石の上は埋まっていなかったものである（次頁参照）。

(3) 埋葬設備および遺物の出土状態

玄室の中央奥壁寄りの所に，石室長軸方向に棺を置くために，人頭大の石を二列並べている。これらの石は棺台であり，この上に木棺に納められた遺体が安置されており（以下，第１被葬者と呼ぶ），第１被葬者の埋葬に伴なう副葬品を奥壁あるいは側壁沿いに片付けたのちに，第１被葬者の左に第１被葬者と同様に石を置いて棺台をつくり，その上に木棺に納められた遺体（以下，第２被葬者と呼ぶ）が安置されている。第１被葬者の右にも石を並べて棺台がつくられている。この部分からは，釘が１本も出土していないので，木棺でなく板に載せられた遺体（以下，第３被葬者と呼ぶ）が安置されたものであろう。

玄室内には，第１～３の３遺体が埋葬されている。羨道には遺物の出土状態からみて，棺台などは置かれてはいないが，２つの木棺が長軸に沿って縦に安置されたと考えられる（以下，羨道の玄門側の遺体を第４被葬者，羨門側の遺体を第５被葬者と呼ぶ）。

第１被葬者は玄室中央に木棺に入れられて安置されており，第２・3被葬者の埋葬に伴なって副葬品が動かされているため定かではないが，他の埋葬遺体のものよりも多くの副葬品が置かれていたと思われ，また，５人の被葬者の内唯一の刀の所持者である。これらから考えて，この古墳を造らせた主人公であったと考えるのは容易である。

第１・２・５被葬者は，共に木棺に納められ，いずれも金環を持ち，第１・２被葬者は装身具の玉類を持っている。これら３人の被葬者は男性であろう。第３・４被葬者は副葬品もほとんど持たず，第３被葬者は板に載せられ，第４被葬者は板葬か木棺葬かははっきりしない。これら２人の被葬者は金環も玉類の装身具も持っていないので女性であったろう。

玄室の副装品は，第１被葬者に伴なうものが第２・３被葬者の埋葬に伴なって一部片付けられた他は，原位置の出土と見える。追葬の際に破壊されたものの一部を除いて，大部分は完形ないしは，それに近い形で検出された。

羨道の埋葬が終わり，黒色火山灰土が羨道に流入（意識的に当時の人が入れたか？）後に，須恵器大甕１個の破片がほおり込まれている。この大甕は葬送儀礼に伴なうものといえよう。

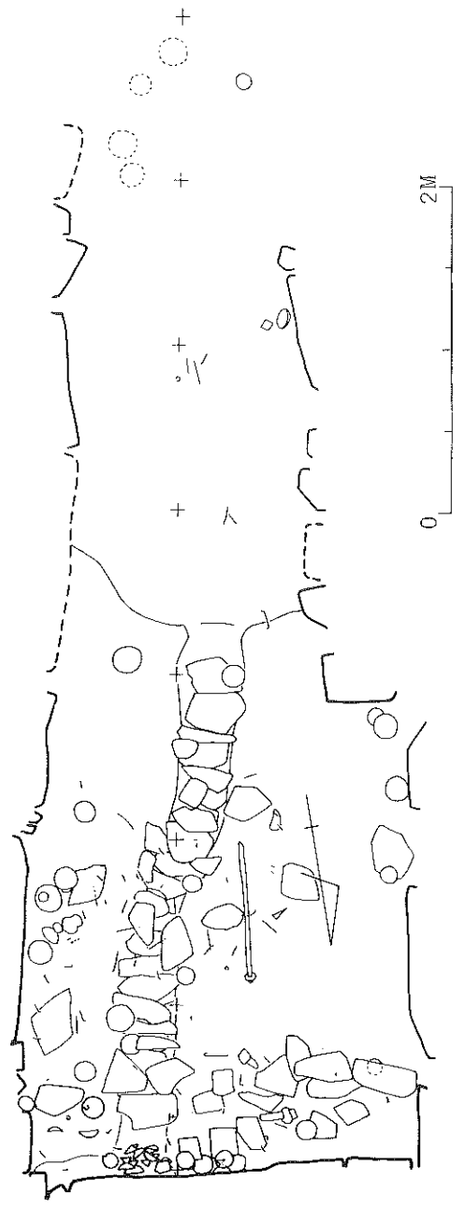


図３　横穴式石室平面図

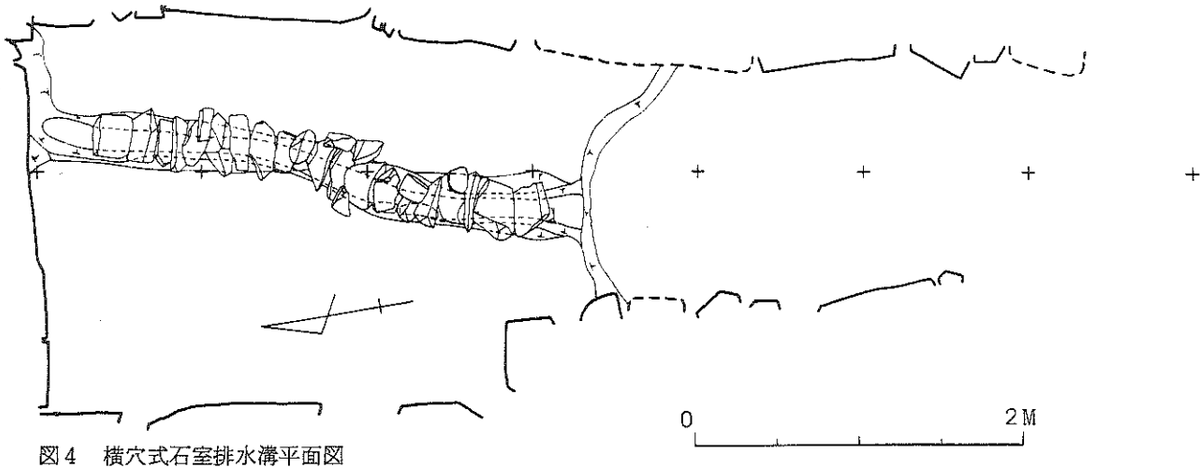


図4　横穴式石室排水溝平面図

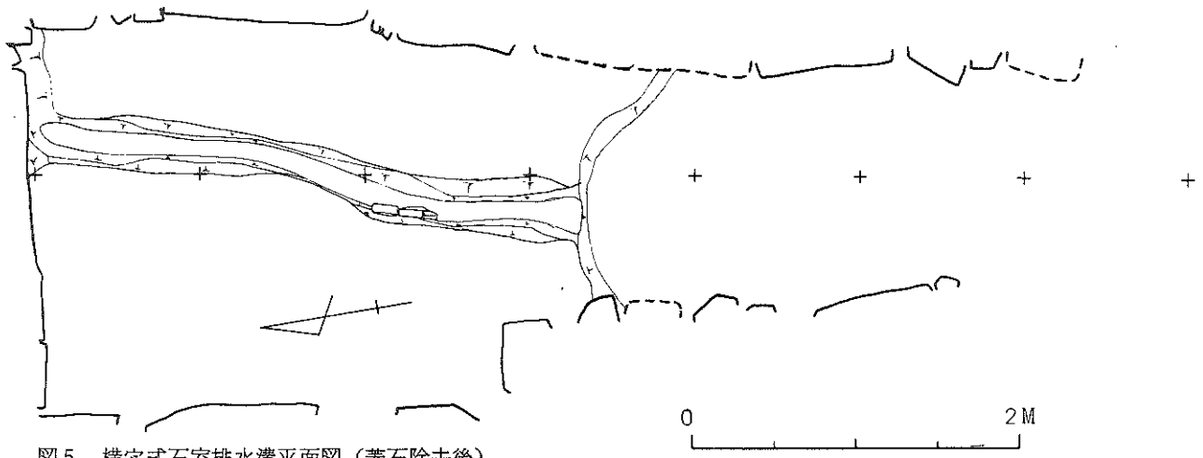


図5　横穴式石室排水溝平面図（蓋石除去後）

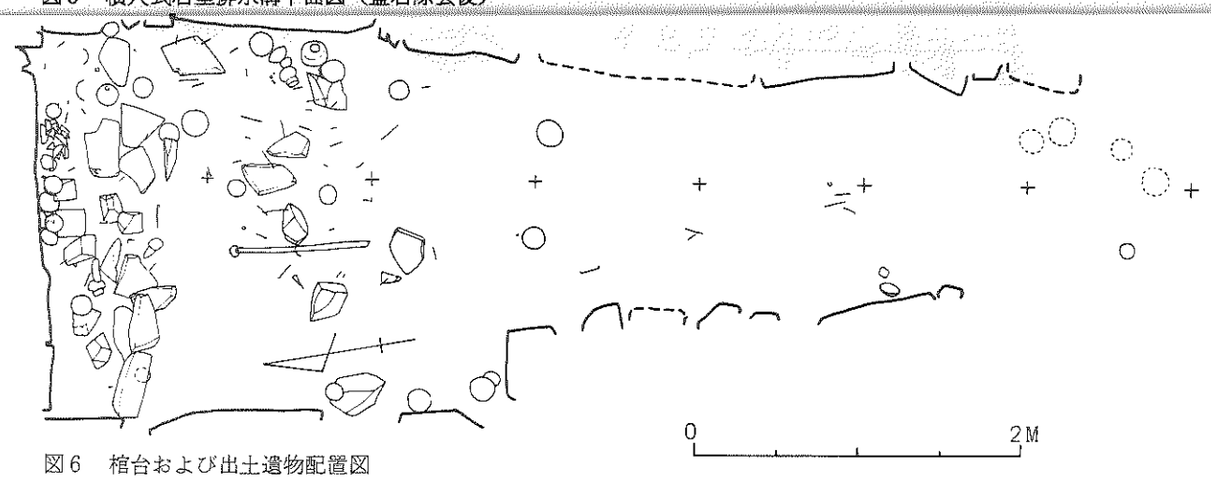


図6　棺台および出土遺物配置図

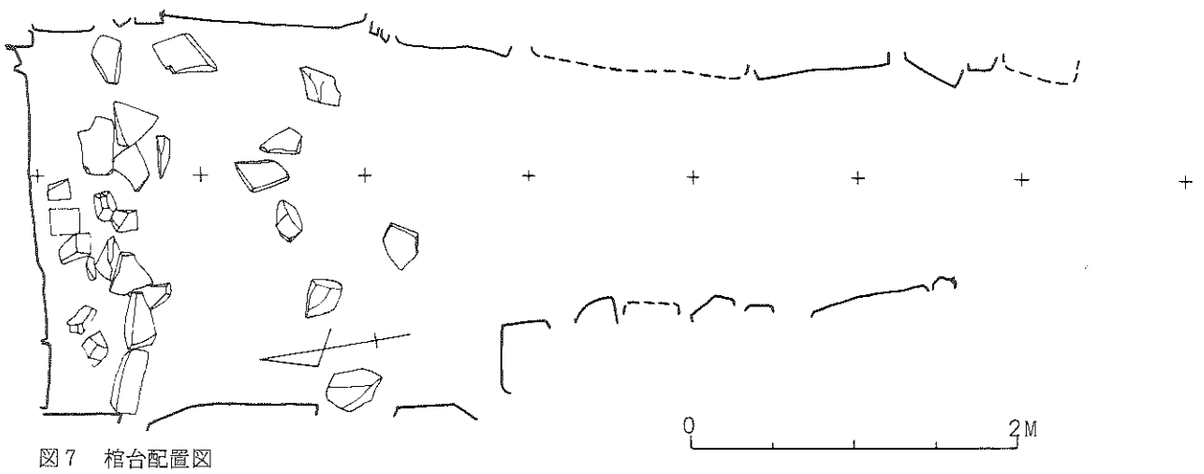


図7　棺台配置図

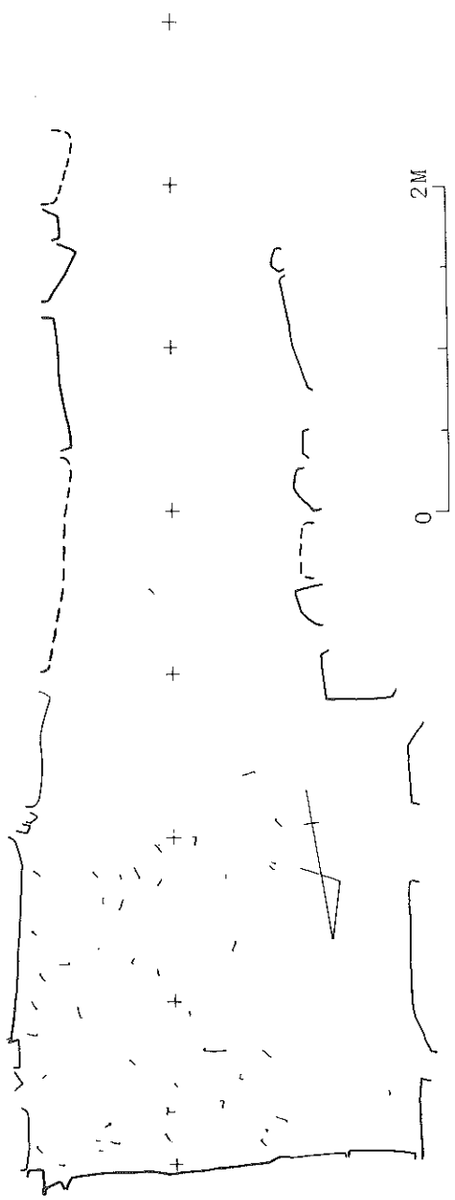


図８　釘配置図

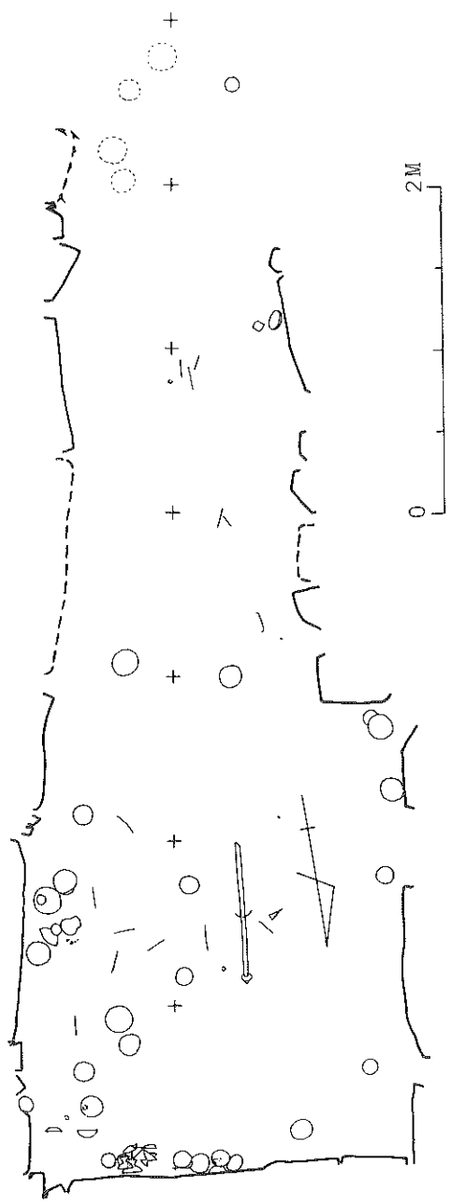


図９　遺物配置図

第四章　出　土　遺　物

出土遺物には，金環５・勾玉２・切子玉１・丸玉３の装身具類，刀１・鏃１８・鏃１・刀子３・鑿１・鎌１・止め金具１・鎹１・釘５０・不明鉄器３の鉄器類，小壺３・平瓶６・提瓶１・坏１７・高台付坏２・椀１・高坏１７・大甕２の須恵器が見られる。

１　装　身　具

金環（第１０図１～４）　金環は５個検出したが，その内１個は玄室東北隅の浸透水のために腐蝕が非常に進んでおり，サビが環状に認められたのみで取り上げることは出来なかった。

金環１・２は，１対のもので，第１被葬者の持ち物である。１は，残存状態がかなり良く，環の外径1.9㎝，断面は4.5×5㎜の楕円形を呈し，銅地に金メッキを施しているがメッキは薄い。２は１と同様のものであったであろうが，錆のため金メッキ部分はなくなり，銅心のみが残っている。金環３は，第２葬者の持ちもので，２と同様に錆のため銅心のみが残存していた。大きさは，１とほぼ同じ大きさであったであろう。３と対をなすものは，調査時点にその痕跡を確認したのみで取り上げ得なかった。金環４は，第５被葬者の持ちものであるが，４と対をなすものは出土しなかった。４の外径は2.4㎝と１～３に比べやや大きく，断面径も7.7×5.4㎝と太くなっている。銅地部分は錆化が

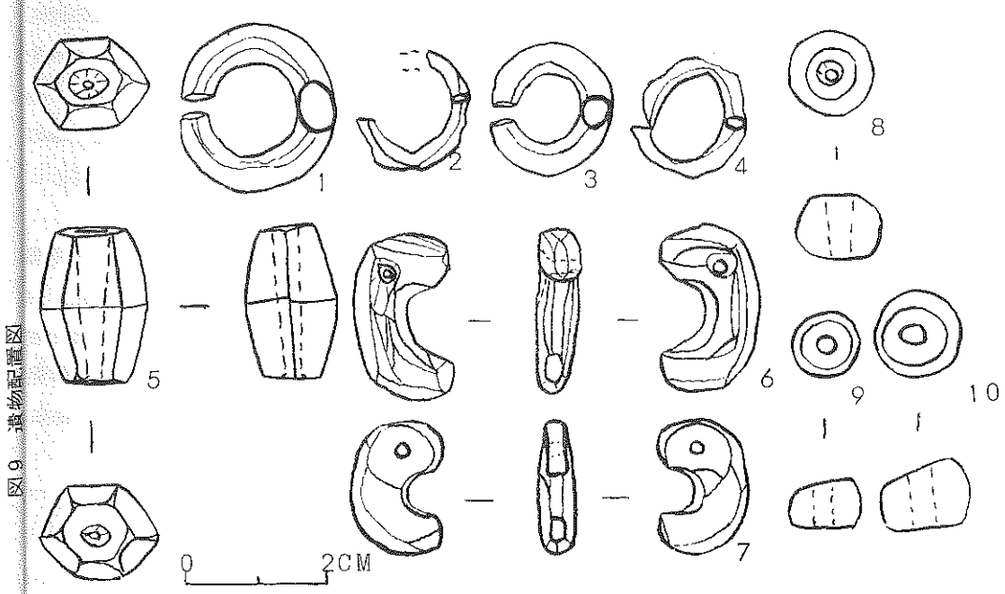


図１０　装身具類実測図

進んでおり，金メッキ部分は良く残存していて，その厚さは0.2㎜を測る。

切子玉（第１０図５）　切子玉は１個のみ出土した。これは，勾玉１個・丸玉２個と共に第２被葬者の持ちものである。これらは，出土状態から見て首飾りとしたものでなく，足元にまとめて置いたかあるいは足首に飾りとしてつけていたものと思われる。長さ2.２５cmで，断面は六角形であるがやゝいびつであり，穴は上面から穿ち，最後に反対側の穴の縁をととのえている。この古墳唯一の水晶製品である。

勾玉（第１０図６・７）　前者は，切子玉と共に第２被葬者の持ちもので，後者は石室内の排土をふるいにかけて出てきたものである。６は赤メノウ製で，長さ2.３５cm・巾1.4cmを測り，頭の部分がややゆがんでいる。７は，風化の進んだ赤メノウの皮部分を使っていて，前者が半透明のアメ色を呈するのに対して，乳白色・茶色を呈する。これはやや小型で，長さ1.9cm・巾1.2cmを測り，外縁とくりの部分は半円形を呈する。

丸玉（第１０図８～１０）　８・９は切子玉，勾玉と共に第２被葬者の足首近くから出土し，１０は第１被葬者の足首近くから出土した。８は青メノウ製で，径1.2cm・高さ0.9cmを測り，きれいに仕上げられている。９は，半透明のアメ色を呈するガラス製で，中に金粉を少しまぜている。径は1.0cm・高さは5.5～７㎜を測る。１０は変成岩製で，径１2.5㎜・高さは７～１０㎜を測る。

２　鉄　　器

刀（第１１図１）　刀は第１被葬者の棺に入れられ，遺体の左側に刃を外にむけておかれていた。さやなどの外装については残存物がないので不明であるが，刀身の保存状態は良好である。この刀には，楕円形のつばとはばき金具と目釘１本が残っていた。刀身は長さ８0.3cm・峯の厚さ６～５㎜を測る直刀で切先は直線的に斜めに切っている。茎は短かくてその長さは6.2cmにすぎない。茎には径４㎜の目釘穴１個があり，刀の右側から目釘を打ちこんでいる。はばきには，巾２cm・厚さ0.1cmの鉄板を楕円形に曲げたものを使い，長径7.5cm，短形4.2cmの楕円形で厚さ0.2cmの鉄板をつばとしている。刀身に比して茎が短かすぎる刀である。

鏃（第１１図）　鏃は第１１図に示すように方形広根斧箭式１・有茎広鋒平造三角形式１・片鋒造端刃棘箆被鑿箭式１２・片丸造端刃棘箆被鑿箭式１・狭鋒両丸造端刃棘箆被鑿式１・棘箆被式（穂先を欠く）２の計１８本を検出した（鏃の形式名……註）。これらの鉄鏃の大部分は，第１・第２被葬者の埋葬に伴なうものと考えられる。２本の広根（１・２）を除いた１６本は箆被ぎの延長部分が見られ，茎との境に突起すなわち棘をつけている。平根の２本を除いて，他のものは実戦的な鏃である。

（注）後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類字雑誌』第５４巻第４号　昭１４年

鏃（第１１図３）　鏃は，第１被葬者の持っていた刀の直下から出土したものである。片鎬造で断面が長方形の茎を付けている。刃部の形は柳葉形をしていて，鎬の側へ全体を曲げて鏃の刃を構成している。削る材料と柄とは約６０°の傾きをなす。刃の部分の長さは８cm（その内先端の半分が削るためにその用をなす）・刃の巾1.7cm・茎の長さは５cmを測る。

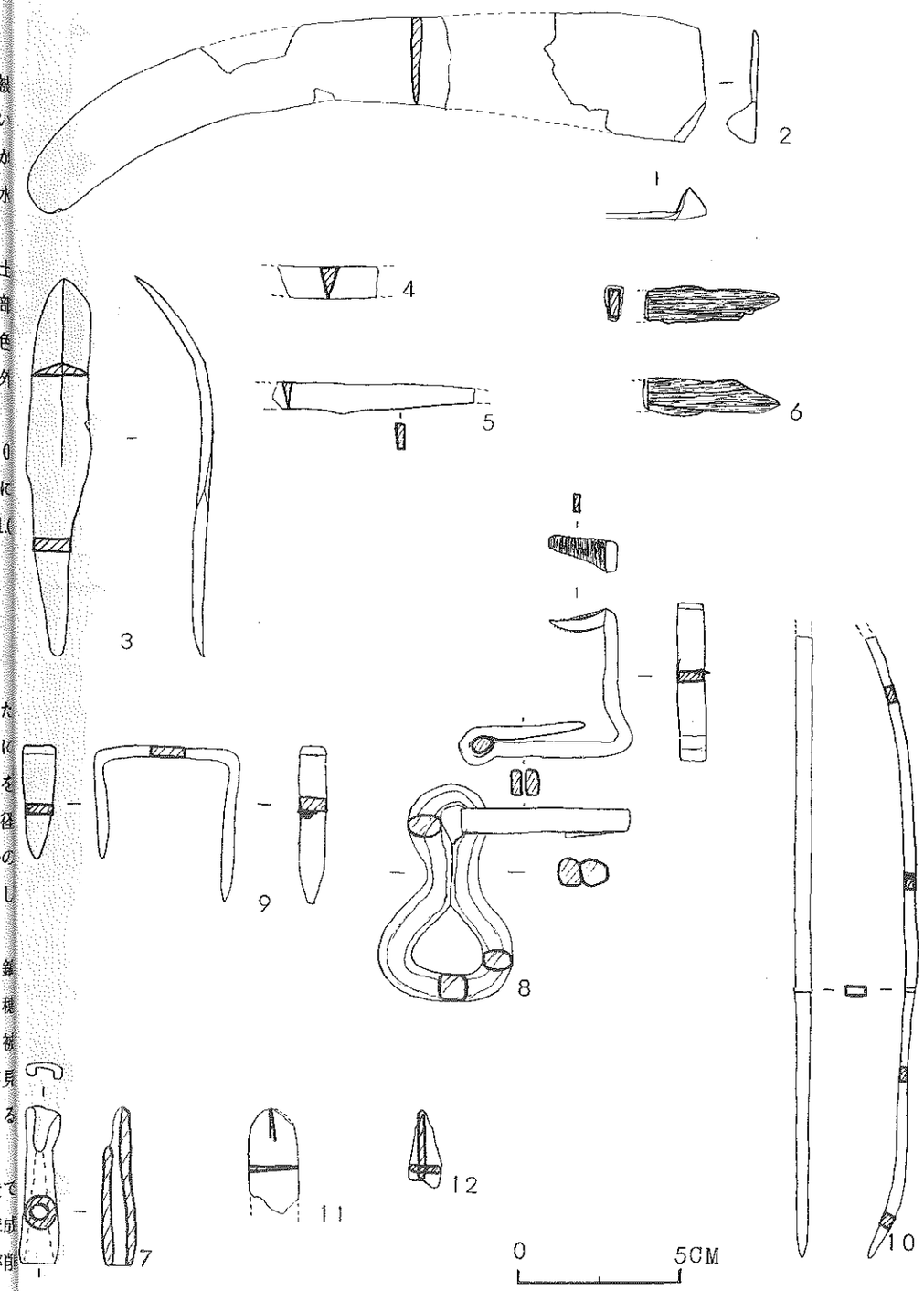


図１１　鉄器実測図

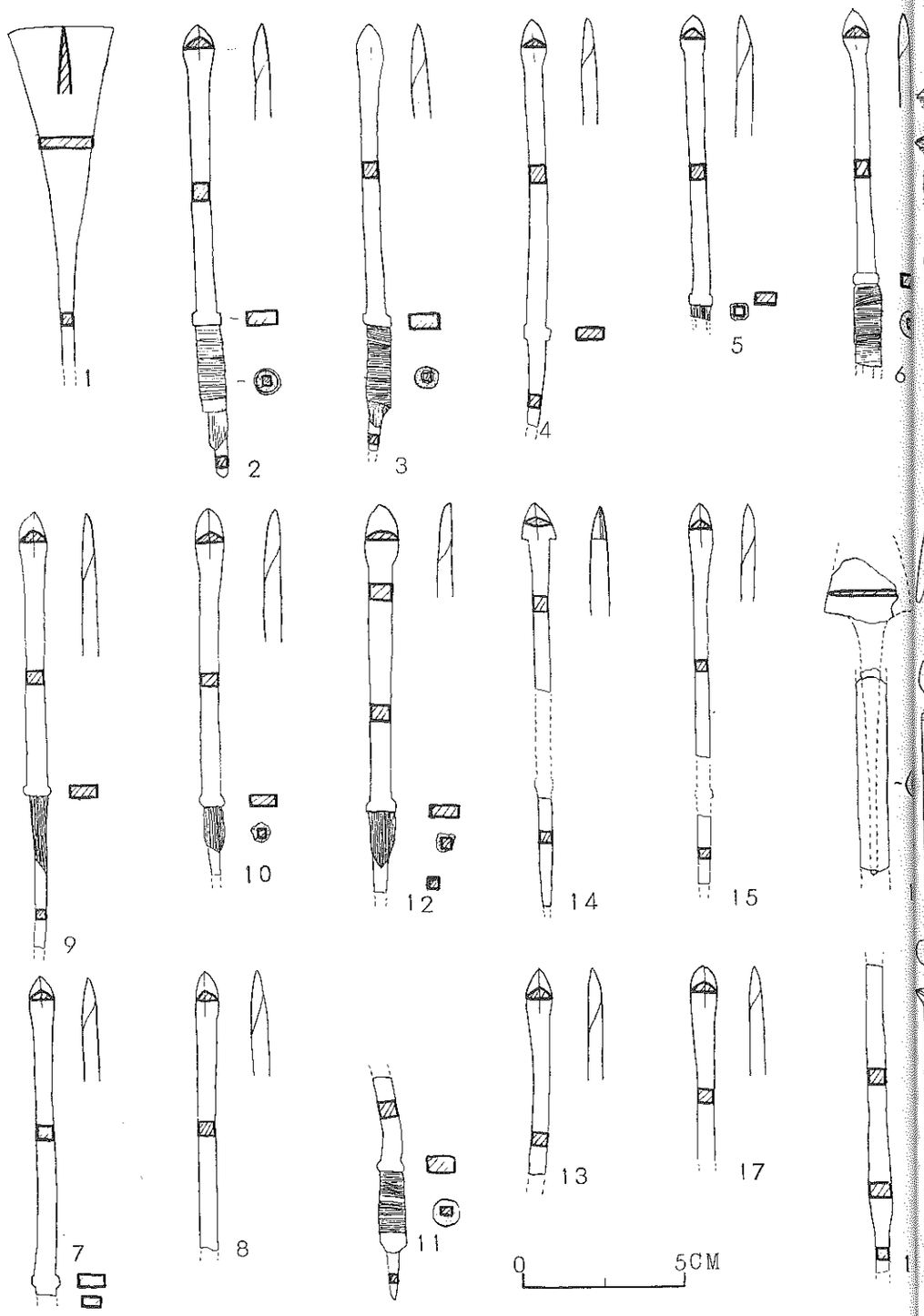
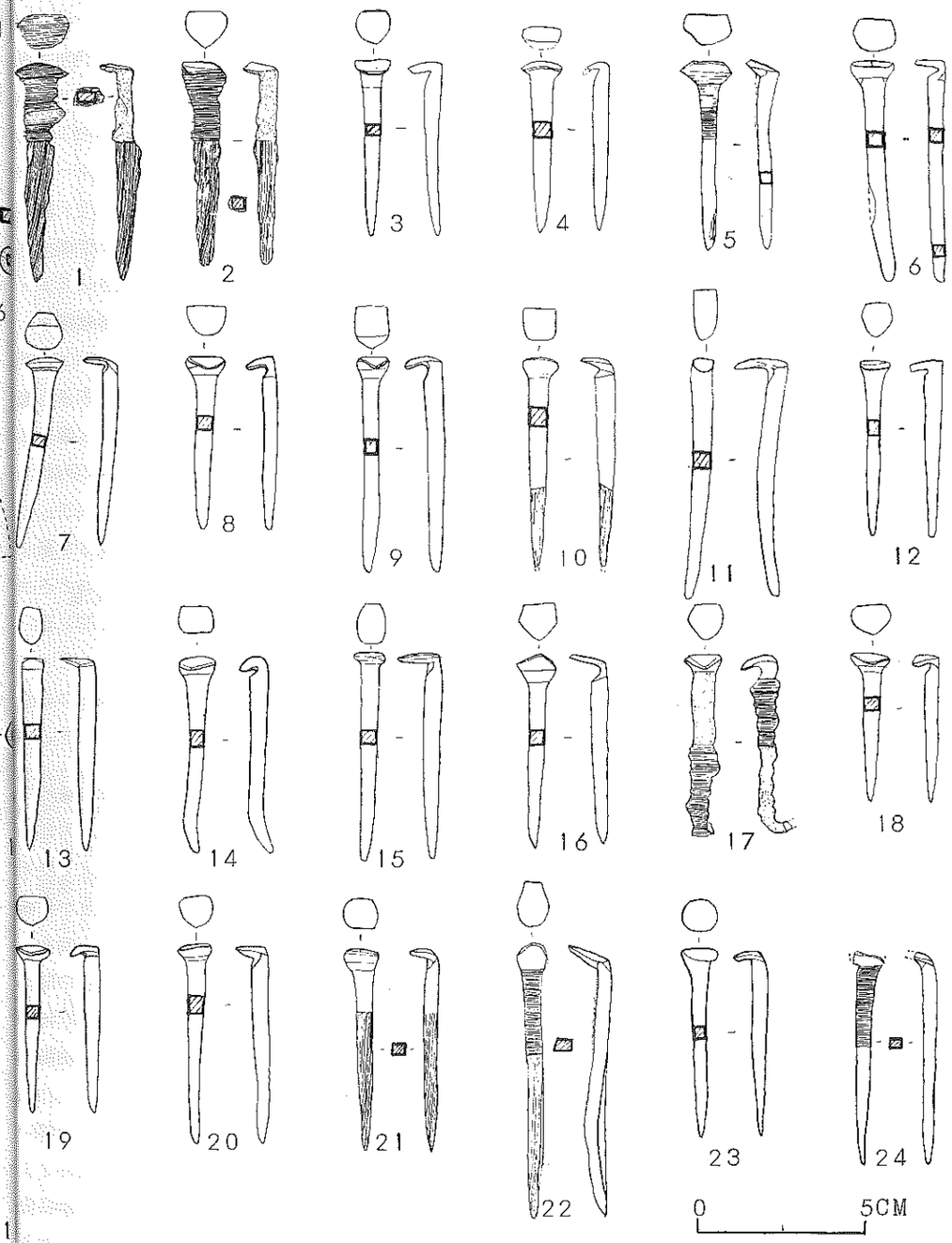


図１２　鉄鏃実測図



第１３　釘実測図１

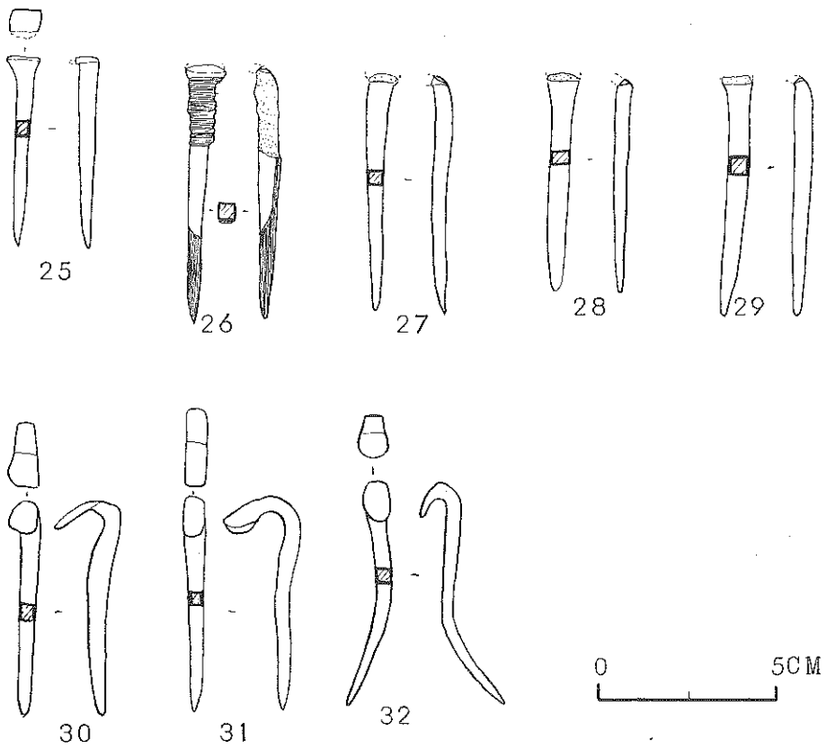


図１４　釘実測図２

刀子（第１１図４～６）　　刀子は３本出土したが，いずれも残片である。４は，刃部の破片で刃巾１０㎜・峯の巾5.5㎜・現存長３cmを測る。５は，刃の大部及び茎の末端を欠いていて，刃部の現存長2.2cm・刃巾8.5㎜・峯の巾２㎜・茎の現存長3.9㎜・茎の厚さ２cmを測る。これは永く使用され磨きこまれている（元の刃巾は9.5㎜以上）。６は茎のみが残存し，その外面には木質が付着している。この木質は，柄が木装であったことを意味しよう。茎の長さは4.1cm・巾0.9cmを測る。

鑿（第１１図７）　　鑿は，床面に設けられた排水溝の底で検出したもので，排水溝の蓋石の間から転落したものであろう。排水溝はその時には埋まってなかったことを物語るものである。刃の部分を欠いているものと思われるが，袋部はよく残存している。全長4.8cm・袋部の長さ3.5cm・袋部径１０㎜・袋部の穴の径９㎜を測り，穴は刃部に近づくほど細くなっている。

鎌（第１１図２）　　この鎌は，墓地造成工事によって出土したもので出土状態ははっきりしないが，入口近くの平瓶（４個）の近くで出土したもので，第５被葬者への副葬品であろう。全長約２１cm（一部を欠く）・刃巾2.4cm・基部巾3.5cm・峯巾３㎜を測り，先端は丸く造っている。刃部の先端から３分の１あたりから大きく彎曲させている。基部の刃の側の角をほぼ直角に曲げて着柄したときに柄の支えとしている。

止め金具（第１１図８）　　これは，第４被葬者に伴なうものである。これは厚さ1.8～3.4cmの板に取りつけられていたものである。８の字形に止め金具をつくり，これに厚さ３～４㎜・巾８㎜の鉄棒を曲げて足としている。片方の足の長さは３cm，他方は１０cmあり，長い方の足は板を打ち抜いて直角に曲げられ，さらに先端部分を再び板に打ち込んでいる。これは，馬具の帯止め金具かあるいは木箱の掛け金具かのどちらかであろう。馬具の帯止め金具にしても木箱の掛け金具にしてもこれに共伴すべき金具は他に出土していないので，どちらとも限定しがたい。

鋏（第１１図９）　　これは第５被葬者の埋葬に伴なうもので，巾10㎜・厚さ３～４㎜長さ１２cmの金棒をコの字形に曲げ，両端を切りおとしてとがらせている。鋏の巾は4.4cm，足の長さは3.2cm・4.5cmを測る。何に使用していたかについては不明である。

不明鉄器（第１１図１０～１２）　　１０は，第２被葬者の棺のすぐ南で検出したもので，先端を欠いているが，現存長１9.5cmで，方形ないしは長方形の断面を呈している。鏃の棘様の突起があり，鏃とも考えられるが，全体に弓なりに彎曲しているので鏃の仲間に入れるのをためらったものである。もし鏃とすれば，茎の長さ8.5cm・篦被ぎの延長部分が１１cm以上のものとなり，前述の１８本の鏃とは別の形式のものであろう。１１は，刀子片とも見られるが，刃はついていない。また先端は丸くなっている茎とすれば全体に薄すぎるものである（厚さ1.0～1.5㎜）。１２は，厚さ２㎜の三角形を呈する破片で，端部は錆のためはっきりしないが丸く終っているかに見える。鏃の平根部の破片であろうか。

釘（第１３・１４図，出土状態については第８図）　　釘は全部で５０本検出した。これらは，第１・２・５被葬者の棺に伴なうものばかりで，この３人の遺体は釘付けされた木棺に納められていたと見ることができる。棺につかわれた板の厚さは，1.93cm・2.4cm・2.7cmの３種が釘に付着して残存している木質からわかる。釘の長さは，4.4cmから8.1cmまで数種（６cm前後のものが多い）に分けられるが，同一棺において長さの統一は認められない。釘の出土位置が埋葬時の棺に打たれた位置に近いものに第２被葬者のものがある。２０～２４cm間隔に打たれており，それによると棺の長さは１７０cm，巾は７０cmであったと推定できる。この第２被葬者の棺に伴なうと考えられる釘の数は１・５被葬者のそれの倍以上となっている。１７の釘のように２枚の板を打ち抜き，その先端を折り曲げているものもある。

3　須　恵　器

副葬された土器は須恵器のみで，土師器の出土はみなかった（石室の埋土中から若干の弥生式土器が出土したが，これは古墳周辺に弥生時代の集落址の存在を裏付けるものである）。

平瓶（第１５図１～６）

１～４は，墓地造成中に掘り出されたもので，羨道部の最後の埋葬（第５被葬者）に伴なう須恵器の一部であろう。１は，胴の径２０.5cm・胴の高さ１４.1cm・口縁部張り付け部の径は5.6cmを測り，丸底で，口縁部を欠いている。砂粒がかなり多く，青灰色を呈している。２は，胴の径１6.3cm・胴の高さ１1.2cm・口縁径9.0cm・口縁張り付け部の径6.0cm・口縁部の高さ5.2～6.2cm・　全器高

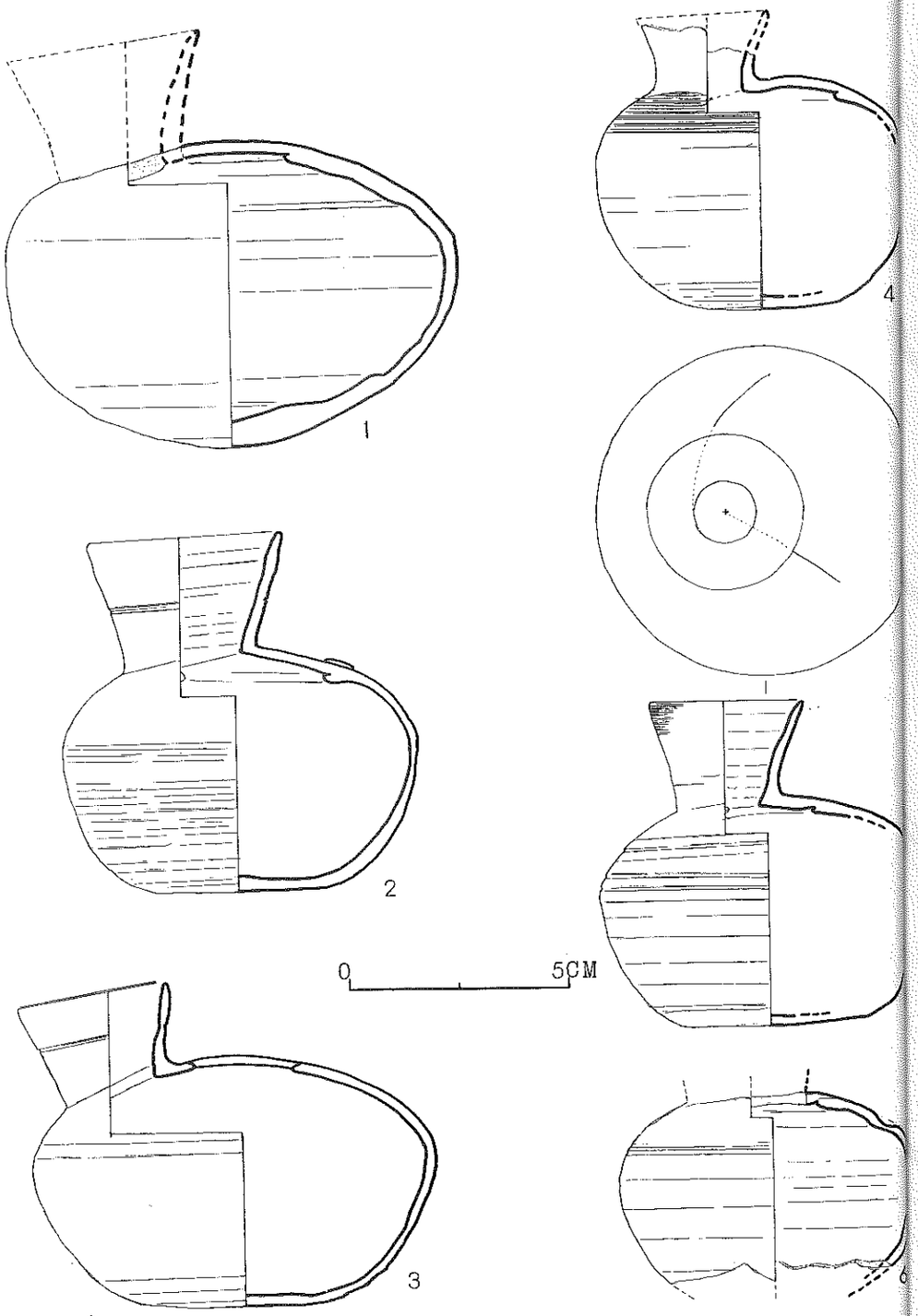


図１５　須恵器実測図１

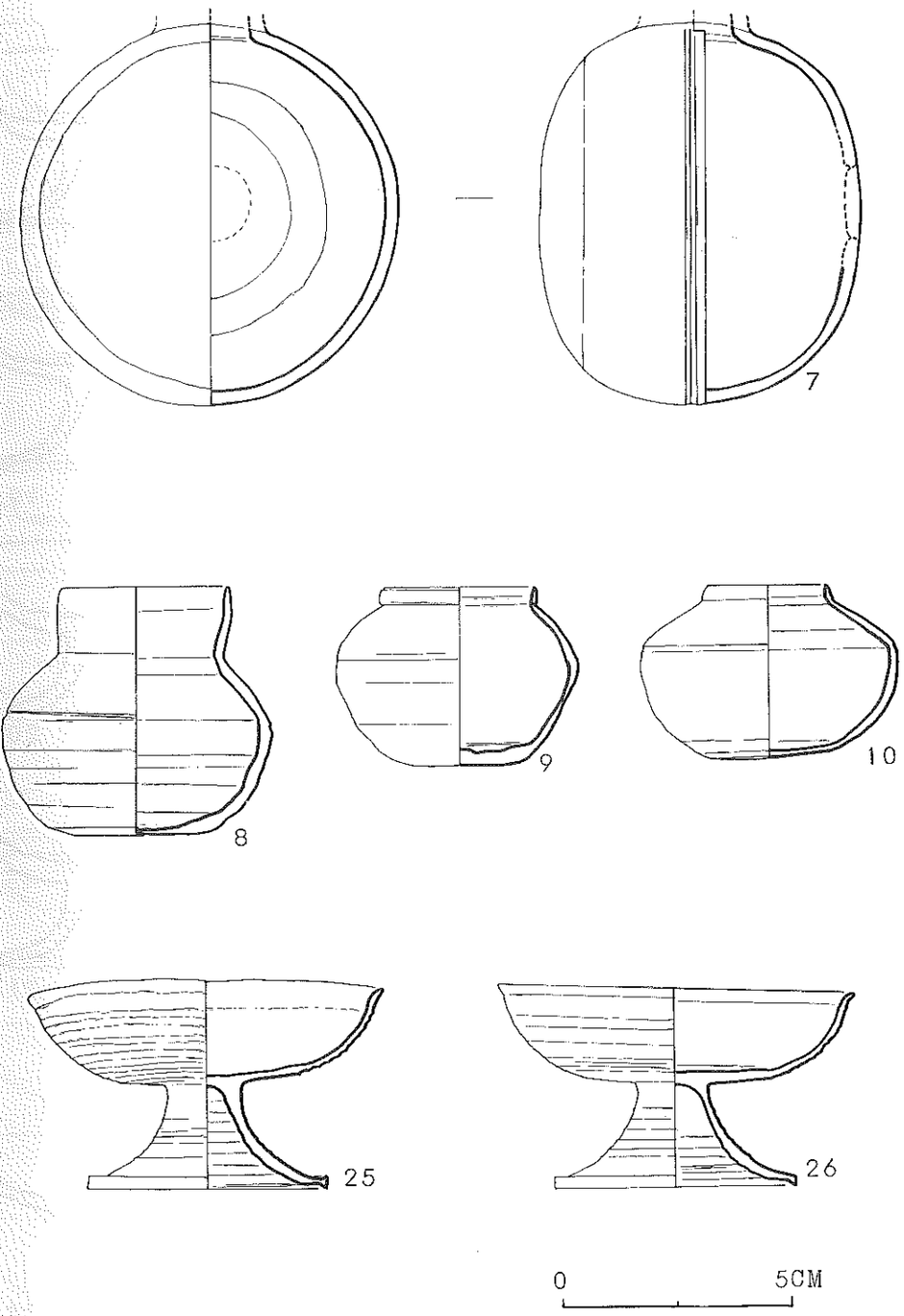


図１６　須恵器実測図２

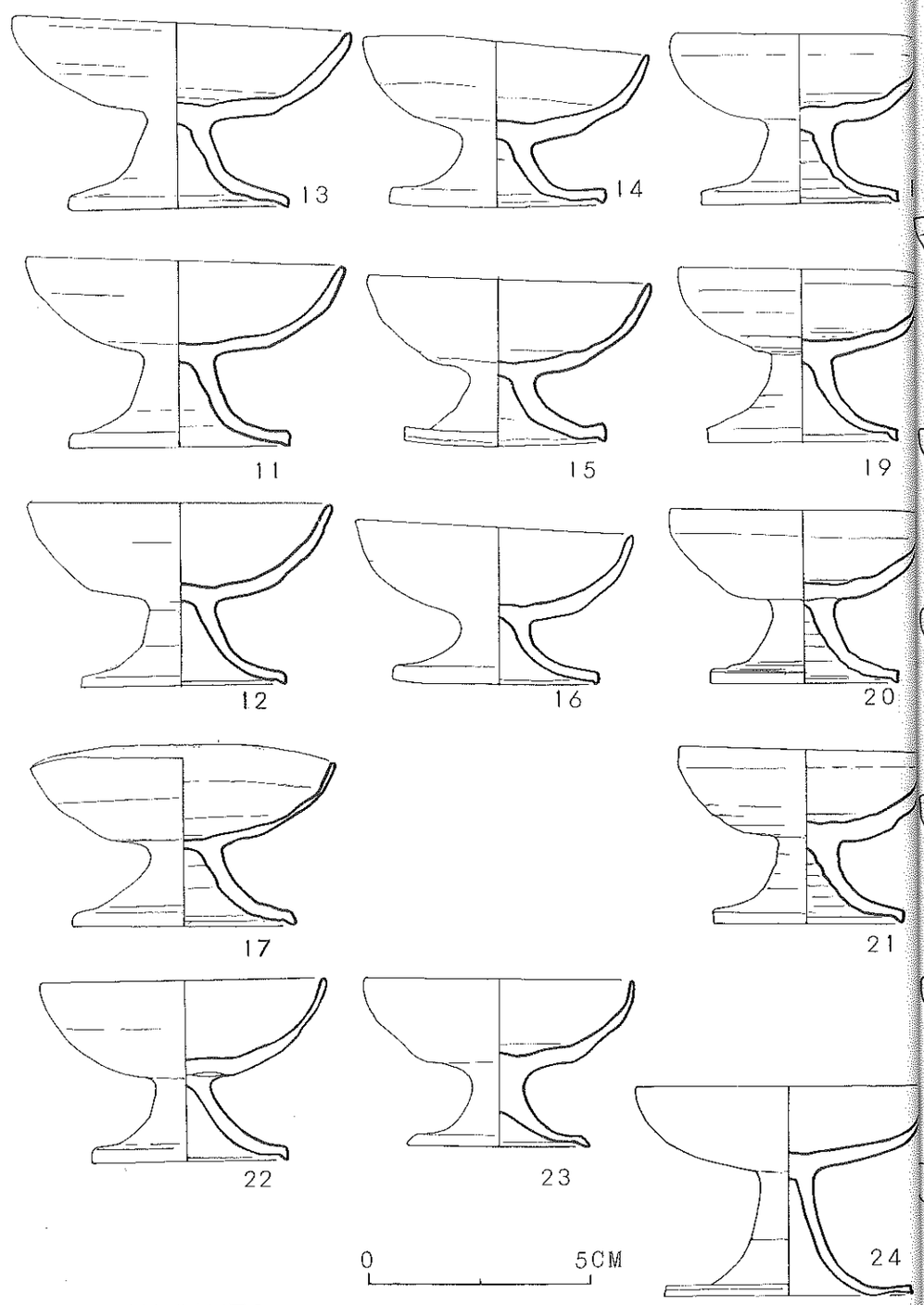


図１７　須恵器実測図３

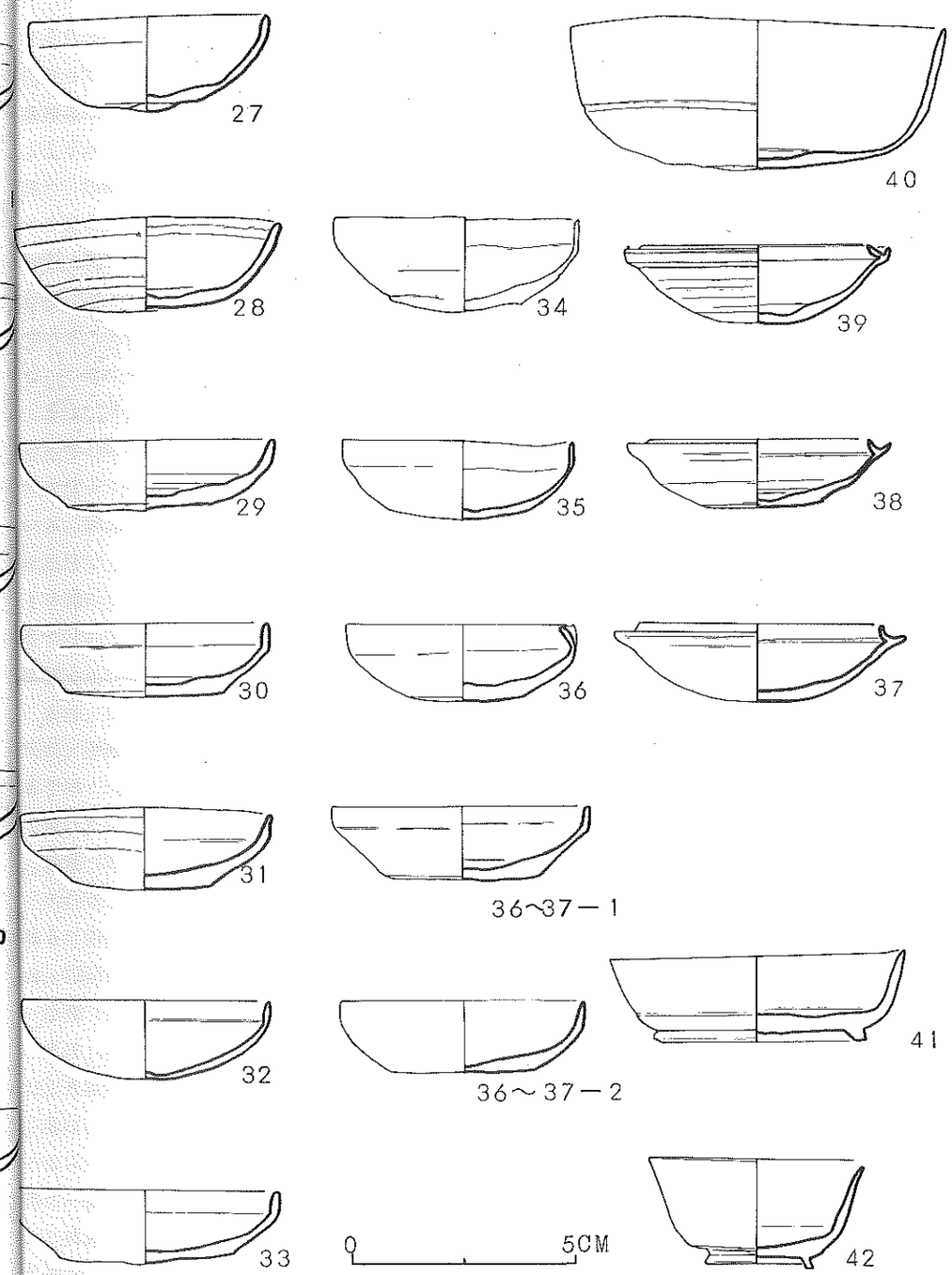


図１８　須恵器実測図４

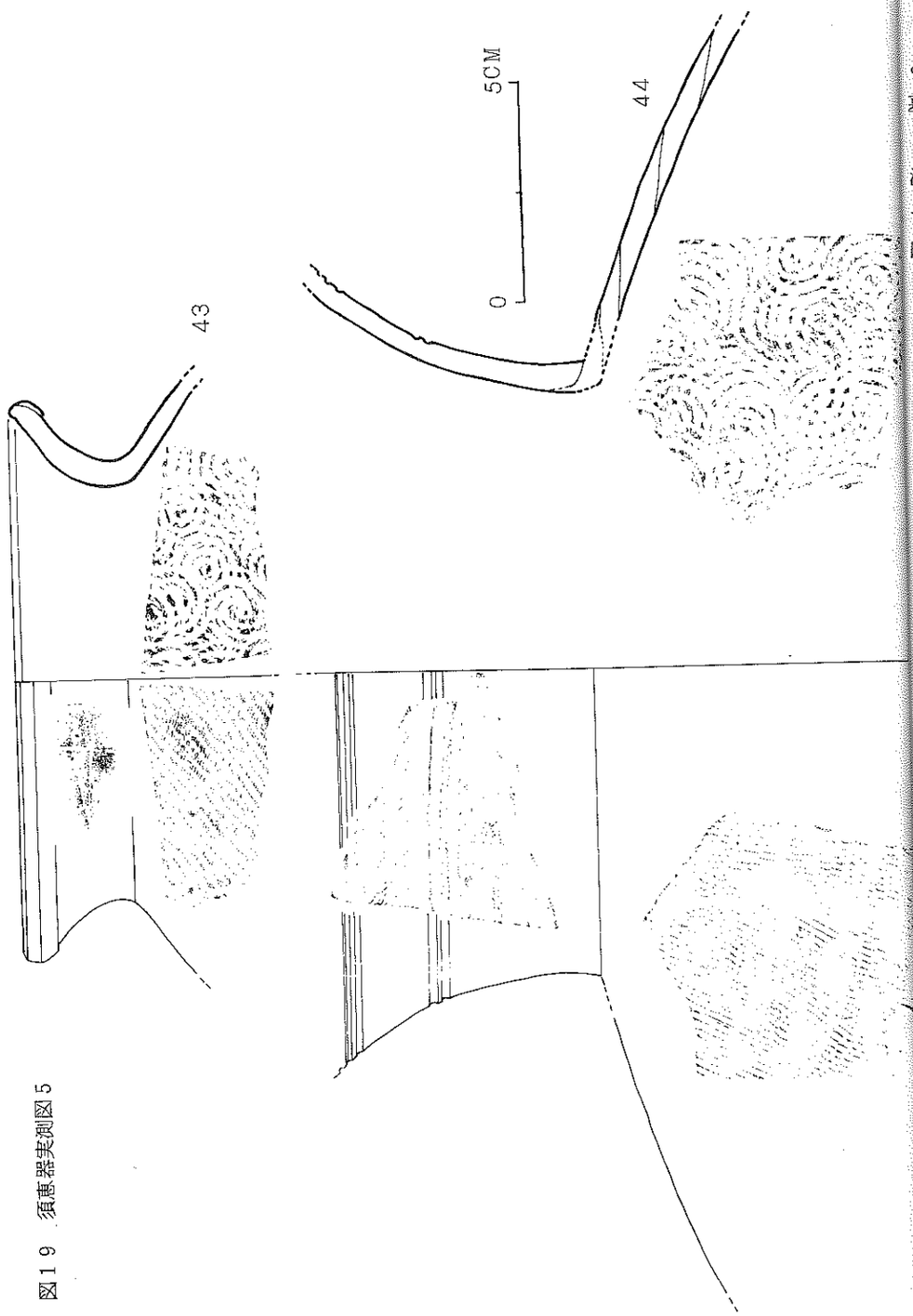


図１９　須恵器実測図５

１６.５㎝を測り，径１３.３㎝・厚さ０.２㎝の粘土円板を１個張り付けていて，底は平底（径７.７㎝）となっている。口縁部中央に一条のヘラ切り沈線が施されている。焼成は良く，白灰色を呈する。墓地造成中にスコップがあたり，こわれているが，完形品である。３は，胴の径１８.４㎝・胴の高さ１１.６㎝・口縁径７.１㎝・口縁張り付け部の径５.２㎝・口縁の高さ３.７～４.５㎝・全器高１５.０㎝を測り，口縁部中央に一条のヘラ切り沈線がめぐらされていて，底は平底（径６.９㎝）である。焼成はやや悪く胴下半の一部を除いて焼成温度が上昇しなくて瓦器状になっていて，灰色ないし乳黒灰色で，断面は乳灰白色を呈する。口縁端部を欠いている。４は，胴の径１４.７㎝・胴の高さ１０.７㎝・口縁張り付け部の径４.６㎝を測り，胴上部は須恵器を回転させながら櫛でなでていて，底は丸底に近く作っている。焼成は良好で，白灰色～灰色を呈する。口縁部は，２・３がロート状になっているのに対して，これはやや外反してひろがっている。口縁端部を欠いている。

５は，第２被葬者の棺と東側壁の間で検出された。胴の径１５.３㎝・胴の高さ１０.６㎝・口縁張り付け部の径５.１㎝・口縁径７.１㎝・口縁部の高さ４.４～５.０㎝・全器高１５.０㎝を測り，底はほぼ平坦になっている（径８.２㎝）。口縁部内面は，全面横なでされ，外面は上３分の１のみ横なでされている。胴上半には３本単位の凹線が２組施されているが，上側のものはやや斜めになっている。焼成は良好で上面にはわずかに灰がかかっていて，白灰色～灰色を呈している。この平瓶の上面には，第１５図の５の上に示すように，２本の刻線が見られる。ヘラ先で細く浅い線をつけているが，口縁部をつける穴をあけるための目印と思われるものである。直線状のものは延長すると穴の中心に至り，弧状のものは穴の周上に至る。

６は，こわれた破片を袖部に置いてあったもので，底部と口縁部を欠いている。底部や口縁部の破片は，追葬の際に石室内を清掃し石室外に持ち出されたのであろう。胴の径１４.２㎝・胴の現存高８.７㎝・口縁張り付け部の径５.５㎝を測る。胴部の肩の部分には，径０.８５㎝の円形のもの（棒の先）で突いた凹みが１つある。これは円板張り付けにかわる装飾と考えられる。

提瓶（第１６図７）

これは，第１被葬者の棺と奥壁との間で検出されたもので，追葬の際こわされ大部分の破片は，平瓶６の場合と同様に，石室外に持ち出されていて，一部の破片が残存するのみである。胴の径１６.８㎝・口縁張り付け部の径４.９㎝を測る。焼成は良好で，内面及び断面はうすい茶色を呈している。

小壺（第１６図８～１０）

８は，第２被葬者の棺と東側壁との間で検出し，９・１０は第１被葬者の棺と奥壁との間で検出した。８は完形品で，９・１０は一部を欠いていて，提瓶の場合と同様であると考えられる。

８は，器高１０.９㎝・胴の径１１.９㎝・頸の径７.４㎝・口縁径７.３㎝を測り，底は径５.５㎝の平底となっていて，頸部から口縁にかけてはやや内弯しながら上方にのび端部はやや薄くなっている。胴部に一条の凹線を施していて，外面の凹線より上部および内面頸部くびれ部より上部は横なでを行ない，外面凹線より下部はヘラ削り後なでている。胎土には雲母の微細片をかなり含み，焼成は良好であるが，頸部はややずれてつくられている。９は，器高７.８㎝・胴の径１０.５㎝・口縁径６.６㎝・頸の高さ０.８㎝を測り，底は径４.１㎝の平底を呈する。胴の最大径部分はやや凹んでおり，凝凹線様に

見える。頚部には，巾５㎜の粘土帯をはりつけだようになっている。胎土には径 0.5 ㎜前後の長石が
かなり含まれており，焼成は良好で内外面とも暗灰色を呈し，断面はチョコレート色を呈している。
１０は，器高 7.7 ㎝・胴の径１１.3 ㎝・頚くびれ部の径 5.9 ㎝・口縁径 5.1 ㎝・頚部の高さ 0.6 ㎝を
測り，底部は径 5.3 ㎝の平底様であるが中央がやや凸起している。口縁部はやや内傾しながら薄くな
って端部をつくっている。胴部に一条の凹線を施し，底部の一部のみヘラ削りを行ない，外面のほと
んどは横なで仕上げとなっている。本来は蓋とセットになっていたと思われるが蓋の出土はなかった

高坏（第１６・１７図１１～２６）

高坏は，第２被葬者棺と東側壁との間，第１～３被葬者棺と奥壁の間および第４被葬者棺の側の３
個所から出土した。奥壁の側から出土した高坏の多くは壊われていた。これは追葬の時に壊わされた
ものであろう。

１１～１３は，第２被葬者棺と東側壁との間で検出したもので，酸化炎で焼かれており，淡灰褐色
を呈しており，同一窯で焼成されたものであろう。１１は器高 8.2 ～ 8.8 ㎝・口縁径１４.5 ㎝・脚の
高さ 4.3 ㎝・裾径１０.0 ㎝，１２は器高 8.2 ～ 8.4 ㎝・口縁径１３.9 ㎝・脚の高さ 3.8 ㎝・裾径 9.
㎝，１３は器高 8.0 ～ 9.0 ㎝・口縁径１５.3 ㎝・脚の高さ 4.0 ～ 4.4 ㎝・裾径１０.0 ㎝を測り，い
れも坏部と脚部との接合が若干ずれていて口縁は傾むいている。

１４～１６は，第２被葬者棺と奥壁との間から出土したもので，この３個も一つの窯で焼成されたも
のである。１４は器高 6.9 ～ 7.8 ㎝・口縁径１３.3 ㎝・脚の高さ 2.8 ～ 3.1 ㎝・裾の径 9.8 ㎝，１
は器高 7.7 ㎝・口縁径１２.9 ㎝・脚の高さ 3.2 ㎝・裾の径 9.1 ㎝，１６は器高 6.9 ～ 7.5 ㎝・口縁
１２.7 ㎝・脚の高さ 2.9 ㎝・裾の径 9.4 ㎝を測り，坏と脚のはりつけはやや傾いている。

１７は，１４～１６と同じ場所から出土した。口縁は１２.0 ㎝×１４.0 ㎝の楕円形を呈し，器高
7.3 ～ 8.3 ㎝・脚の高さ 3.7 ㎝・裾の径１０.2 ㎝を測る。焼成は良く，灰白色を呈していて，径 0.
～ 1.0 ㎜の砂粒を多く含んでいる。

１８～２０は，第１被葬者棺と奥壁との間で検出されたものであり，いずれも焼成はやや甘く，
灰白色～乳灰色を呈していて，同一窯で焼成されたものである。１８は器高 7.6 ～ 7.8 ㎝・口縁径
1.7 ㎝・脚の高さ 3.7 ㎝・裾の径 9.0 ㎝，１９は器高 7.8 ～ 8.1 ㎝・口縁径１１.6 ㎝・脚の高さ 4.
㎝・裾の径 8.6 ㎝，２０は器高 7.8 ～ 8.0 ㎝・口縁径１２.2 ㎝・脚の高さ 3.9 ㎝・裾の径 8.4 ㎝，２
は器高 7.8 ～ 8.1 ㎝・口縁径１２.0 ㎝・脚の高さ 3.8 ～ 4.0 ㎝・裾径 8.7 ㎝を測る。坏部と脚部の
合がわずかに傾いている。

２２～２４は，１４～１７と同じ場所から出土したもので，焼成は悪く，内外面ともに乳黒灰色
断面は乳灰白色を呈し，瓦器とも見え，同一窯で焼成されたものである。２２は器高 7.5 ㎝・口縁
１１.5 ㎝・脚の高さ 4.5 ㎝・裾の径８３㎝・２３は器高 7.5 ㎝・口縁径１１.6 ㎝・脚の高さ 4.5 ㎝
裾の径 8.4 ㎝，２４は器高 7.6 ㎝・口縁径１１.5 ㎝・脚の高さ 4.5 ㎝・裾の径８４㎝を測る。

２５・２６は羨道部の第４被葬者棺のすぐ奥で出土したものである。２６の上に２５を重ねて焼
しており，砂粒（径 0.5 ～ 1.0 ㎜）が非常に多く含まれていて表面はざらっとした感じになってい
この２個の高坏は，他の高坏と異なり，口縁径が１５.5 ㎝と大きく，口縁端部は外反し薄くなっ

いる。２個とも同じ大きさで，器高 8.8 ㎝・口縁径１５.5 ㎝・脚の高さ 4.6 ㎝・裾径１０.6 ㎝を測る。
２５の一部に焼きひずみが見られる。胴外面の大部分および脚の中央部には巾５㎜の先端が孤状のも
のでなでて仕上げている。

坏（第１８図２７～３６）

２７は口縁径１１.1 ㎝・高さ 2.9 ㎝・底部（平底）径径 6.9 ㎝を測り，内外面とも横なで仕上げで
あり，底部は回転ヘラ切りで粘土塊から切りはなされている。焼成は甘い。２８・２９は共に口縁径
１１.1 ㎝・高さ 2.9 ㎝・底部径 6.8 ㎝を測り，２７に比して底部から胴部にかけてやや外反している。
焼成は甘い。３０は口縁径１１.5 ㎝・高さ 2.6 ㎝・底部径 7.9 ㎝を測り，径は２８・２９より少し大
きいが整形・焼成は２８・２９に類似する。３１は，口縁がややひずんでおり，口縁は１１.2 ㎝ ×
１０.5 ㎝の楕円形を呈し，高さ 3.2 ～ 3.9 ㎝を測り，径２～５㎜の石英・長石粒を多く含んでいるが
整形はかなり良く，焼成温度はよく上がっていて一部に自然釉がかかっている。３２は，口縁径 119
㎝×１０.8 ㎝の楕円形を呈し，高さは 3.8 ㎝を測り，底部は回転ヘラ切り起しとなっている。３３は
口縁径１０.4 ㎝・高さ 3.8 ㎝を測り，整形・焼成ともに良好であるが底部にはヘラ切りカスの粘土が
ついている。３４は，口縁に焼きひずみがあり，径は１１.0 ㎝・高さ 3.6 ㎝を測る。３５は，口縁径
１０.6 ㎝・高さ 3.4 ㎝を測り，乾燥しないうちに持ったため指紋がついている。胎土はよくてほとん
ど砂粒はない。３６は，口縁部の一部が焼きひずみのために内傾しているが，口縁径１０.1 ㎝・高さ
3.1 ㎝を測り，回転ヘラ切り起し後，板の上にのせて乾燥している。２７～３５は玄室内出土で，36
は羨道部出土である。

坏は，２７～３６の他に，図示しなかったが３個体分の小破片が石室内から出土している。

坏身（第１８図３７～３９）

３７～３９の３個の坏身の出土をみたが，坏蓋はまったく検出しなかった。３７は第３被葬者棺と
西側壁の間，西壁に接して出土し，３８は第３被葬者棺の棺台の石の下になっているのを検出し，３９
は第１被葬者棺と奥壁との間から出土した。３７は器高 3.6 ㎝・最大径１３.1 ㎝・口縁径１１.0 ㎝・
蓋受け部の立ち上がり 0.6 ㎝を測り，底は丸底となっている。焼成は良好で下向きに置いて焼かれて
いる。３７は器高 3.1 ㎝・最大径１１.8 ㎝・口縁径 9.8 ㎝・蓋受け部の立ち上がり 0.5 ㎝を測り，底
は径 5.5 ㎝の平底となっている。焼成は良好で白灰色を呈し，外面全体に淡緑色の自然釉がかかって
いる。３９は器高 3.6 ㎝・最大径１２.0 ㎝・口縁径１０.2 ㎝・蓋受け部立ち上がり 0.5 ㎝を測り，底
は径 3.0 ㎝の平底となっている。蓋受け部凸起は上方に立ち上がっている。前２者とは異なりヘラ削
りがかなり上方まで施されている。

埦（第１８図４０）

４０は第２被葬者棺の棺台の間の床面で検出されたもので，第２被葬者の棺の下から出土したとい
える。器高 6.5 ～ 7.0 ㎝・口縁径１７.9 ㎝を測る。器壁はやや外にひろがりながら上方にのびており，
胴に一条のヘラ書き凹線が施されている。

高台付坏（第１８図４１・４２）

４１は高坏２５・２６と共に羨道部の第４被葬者棺のすぐ奥で出土したものであり，４２は墓地造

成工事中に平瓶などと共に出土したもので第４被葬者棺に伴なうものであろう。４１は器高3.7〜4.2cm・口縁径１3.3cm・高台の高さ0.5cm・高台の径8.7cmを測り，径にくらべ高さは低い。器壁は外にわずかに開きながら上方にのびている。４２は器高4.7〜4.9cm・口縁径9.6cm・高台の高さ0.5〜0.6cm・高台計4.8cmを測り，器壁はやや開きながら外反して上方にのび口縁端部を薄くしている。焼成は悪く，酸化炎で焼かれていて，淡黄褐色〜淡灰褐色を呈している。

甕（第１９図４３・４４）

４３は羨道部の埋葬終了後にほおり込んだものであり，４４は周湟底部から出土したものである。４３は破片の一部が残存するのみであり，４４は墓地造成中にその一部が出土しただけで残りの部分は墓地下に埋まっているものと思われる。４３は，口縁径２3.8cm・頸径１7.6cm・頸部の高さ4.5cm・胴の径４7.0cm以上をはかる。頸部外面には，ヘラ先による刻線「×」印がつけられており，内面には青海波紋・外面には格子目のたたきが施されており，外面はたたき後，くしでなでられている。４４は，口縁端部の出土を見ないので口縁径はわからないが，頸の高さ１2.0cm以上，頸径２0.0cm，胴の径８8.0cm以上を測り，高さは１mを超えるものと推測される。頸部外面に１組２本の凹線が２組めぐらされ，頸部を３つの区画に分け，その中央の区間にくしによる波状文を施している。

第五章　考　　察

円通寺古墳の調査・整理を通して，次の諸点が提起できる。

1) 横穴式石室の玄室の長さは2.9mとやや短いが，巾は2.4mを測り，当地方としては最大級である。このことから被葬者の性格も限定が可能であろう。

2) 石室規模・推定埋葬遺体数に比し，装身具類が少ない（金環４個・勾玉２個・丸玉３個・切子玉１個・合計１０個）。

3) 金環はいずれも耳につけたまま埋められたものであろうが，他の玉類は頸飾りを想起する位置からの出土ではなくて，遺体の足もとと思われる部分から出土している。このことから，少量の玉類は足もとへ副葬品として入れられたものであろう。

4) 古墳の築造時期はいつで，いつまで追葬がなされたか。

1)については，岡山県北西部に位置している新見阿哲地方で玄室の巾が２mをこえるものは，円通寺古墳の他には，新見市横見の横見古墳が知られている。横見古墳は，中国縦貫自動車道建設に伴なって調査され消滅したもので，調査時には既に羨道および玄室の一部は破壊されていたが残存玄室の長さは４mをこえるものであった。これに比べて円通寺古墳のものは玄室の長さが短い。しかし，刑部平地を中心とする豪族の首長の墓であることはまちがいない。最近の調査で，刑部平地に条里地割も残存していることがわかっている。

2)については，推定埋葬遺体５体のうちの３体が金環・玉類を持っていた。各１体のもつ量は，金環１対と丸玉１個，金環１対と勾玉２個・丸玉２個・切子玉１個，金環１対であり，他の２体は玉類は持っていなかった。玉類の量が経済的差によるものか身分的差によるものかは判然としないが，玉類がいずれも被葬者の足もとに入れられていたというのは，一般的に玉類は首かざりに利用されたとされているが，この円通寺古墳については二通りの解釈ができる。その１は，足もとに単なる副葬品として納めたであろうという考え方であり，その２は，これらの玉類は足くびに足輪としていたという考え方である。その２の考え方は，さらに発展させると，玉類の着装が身分的階級的差を意味していると考えられないこともないかもしれない。

4)については，出土須恵器から判断して６世紀後半前葉に最初の埋葬が行なわれ，最後の埋葬は７世紀前半前葉に行なわれたものと判断できよう。

最後になりましたが，大佐町川添町長をはじめ，町当局・町教育委員会・町中央公民館の職員の方々の御援助と御協力により，また炎天下の作業に従事していただいた方々の御協力により調査を終了でき，また，本書を発行していただき感謝の念にたえません。記して感謝の意を表します。

また，本書が古代史研究の一途になれば幸いであり，合わせて文化財保護の啓蒙になればと念じております。なお，出土遺物については，大佐町中央公民館に展示・保管してあります。

あ　と　が　き

このたびの円通寺古墳の発掘調査は，大佐町にとって有史以来の画期的なものでありました。

5,０００町民のこの発掘調査に寄せる感心と期待は，誠に大きなものがあり，近年の地域開発と文化財保護が論じられているとき当を得た調査でした。

発掘調査の実施にあたっては幾多の困難もありましたが，寺院を始め墓地整備工事請負業者等関係者のご協力，発掘調査担当の田仲満雄教諭の献身的な努力により貴重な成果をあげて終了し，ここに報告書を発刊する運びとなり同慶に存じます。

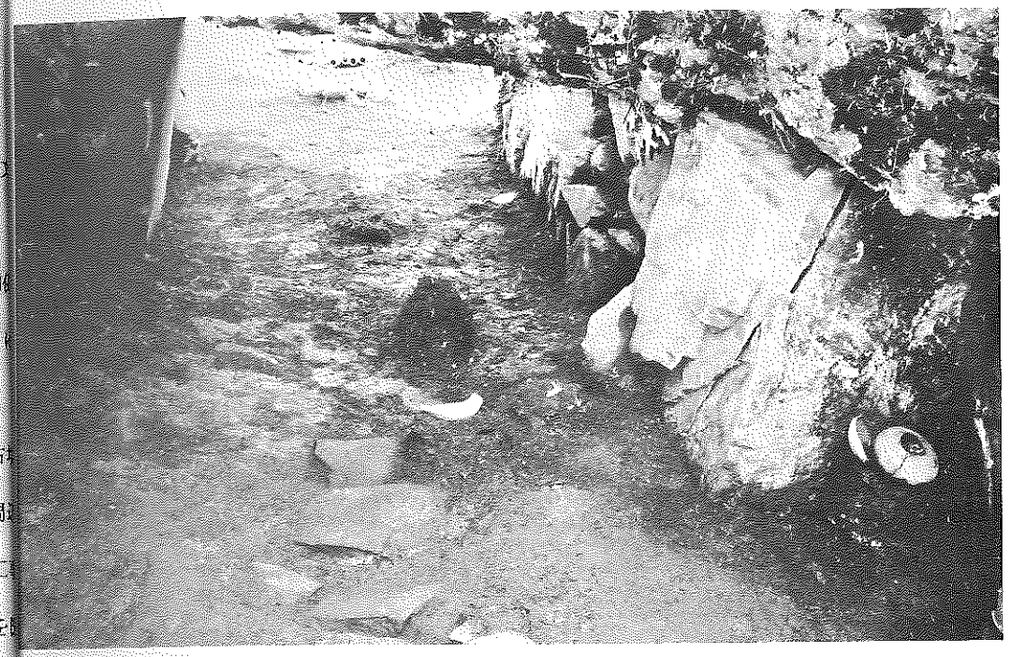
円通寺古墳の規模は備北地域においても稀な大型古墳で今回の調査で他にもこのような規模の古墳の存在が確認されています。このことからおして千数百年前から小阪部が文化的にも経済的にも周辺地域の中心地であることも容易に推察できます。調査後は永久に遺跡として保存できるよう復旧工事も完了しています。更に教育委員会としては古墳群出土品を町の重要文化財に指定し，保存保護をはるとともに郷土研究等の資料に供したいと考えています。

おわりになりましたが発掘から本報告書作成まですべてを担当された大佐中学校田仲教諭に衷心より敬意を表します。

昭和５３年３月

大佐町教育委員会

池　田　　宏



1. 横穴式石室羨道（入口側から）

2. 横穴式石室袖部（玄室側）

写真 2

1. 玄室奥壁

2. 玄室側壁（東側）

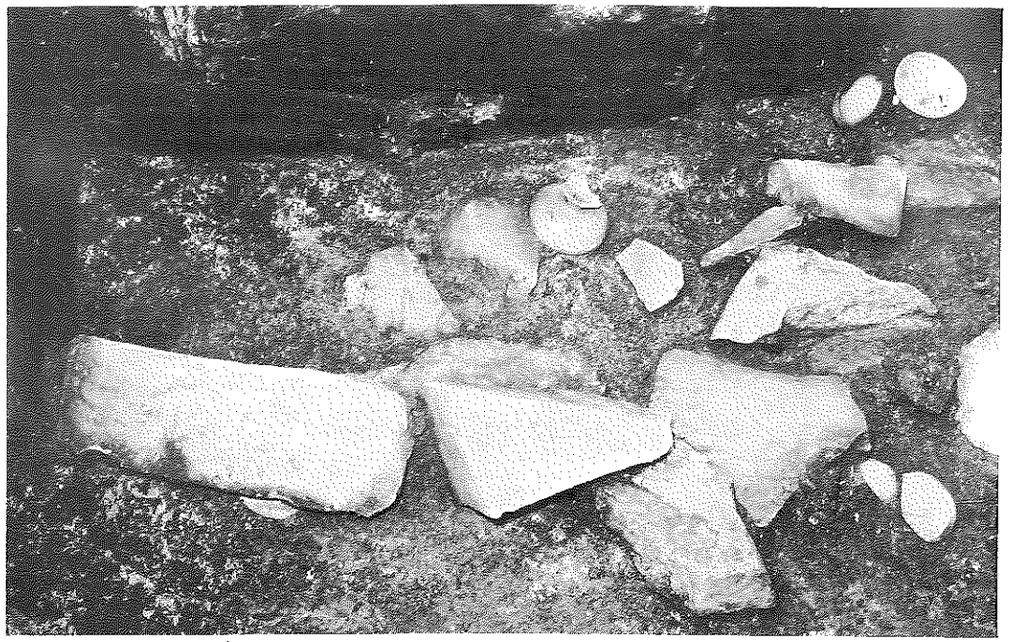
写真 3

1. 棺台および遺物出土状態

2. 棺台および遺物出土状態

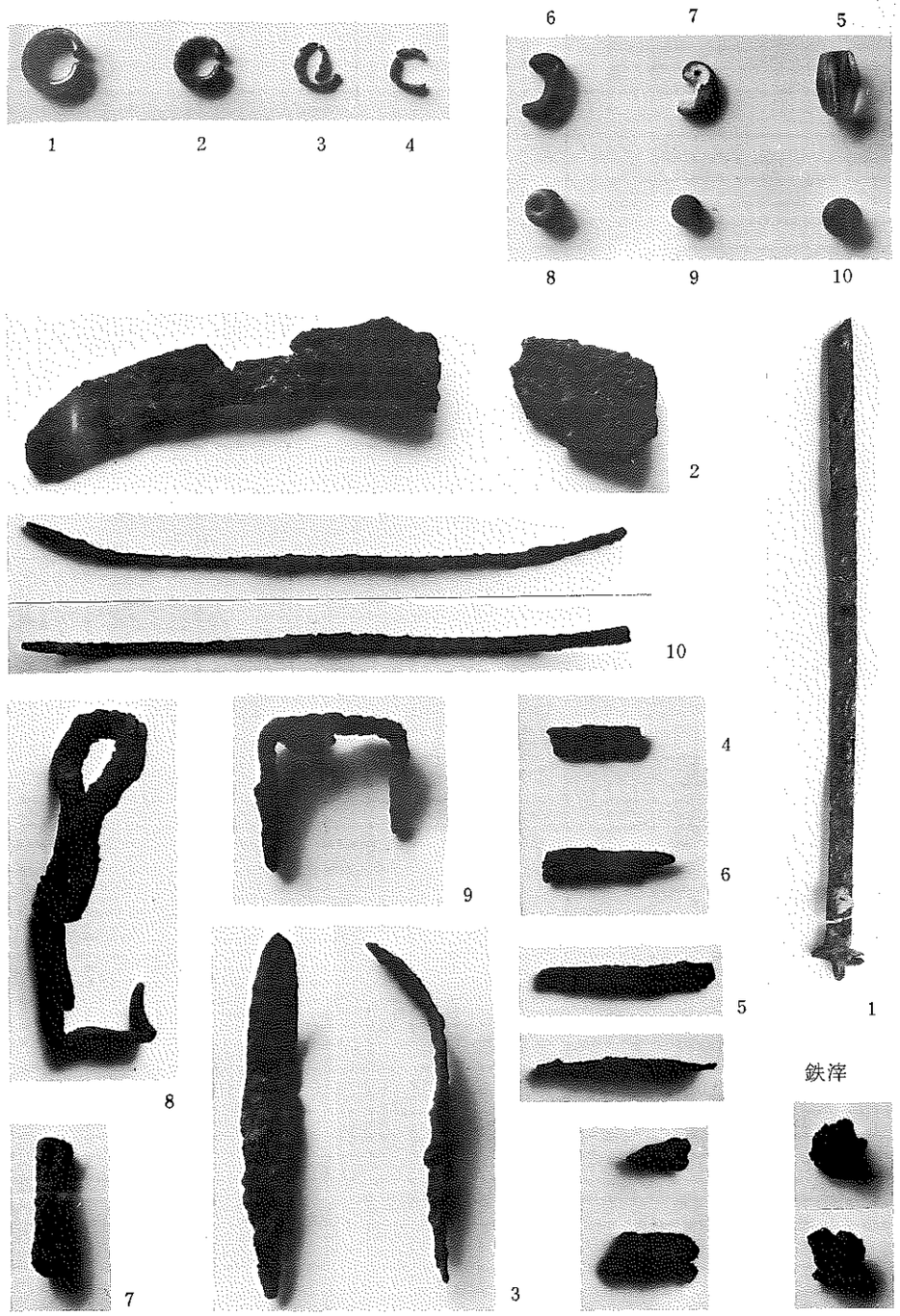
写真 4

1. 遺物出土状態



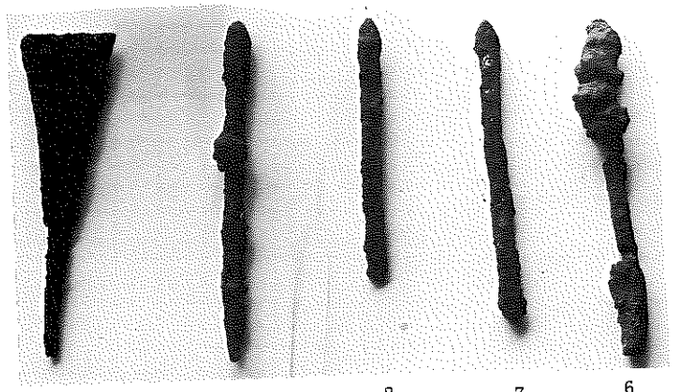
2. 遺物出土状態

写真 5

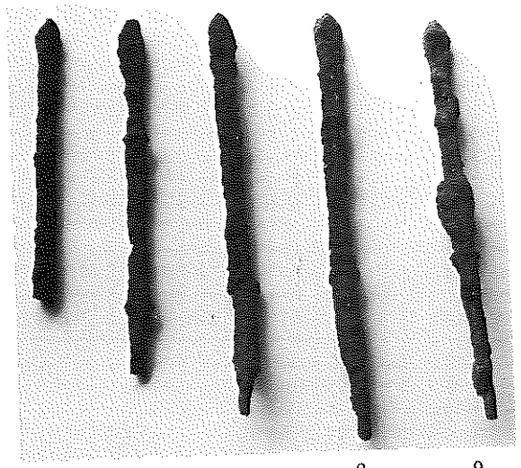


装身具および鉄器

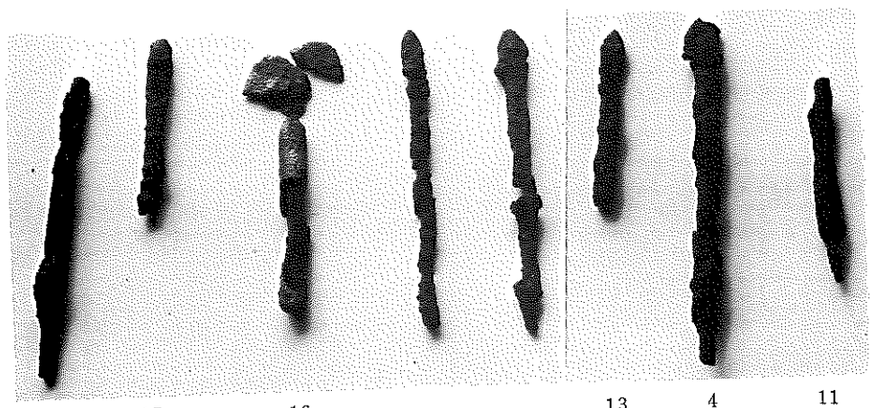
写真 6



1　10　8　7　6



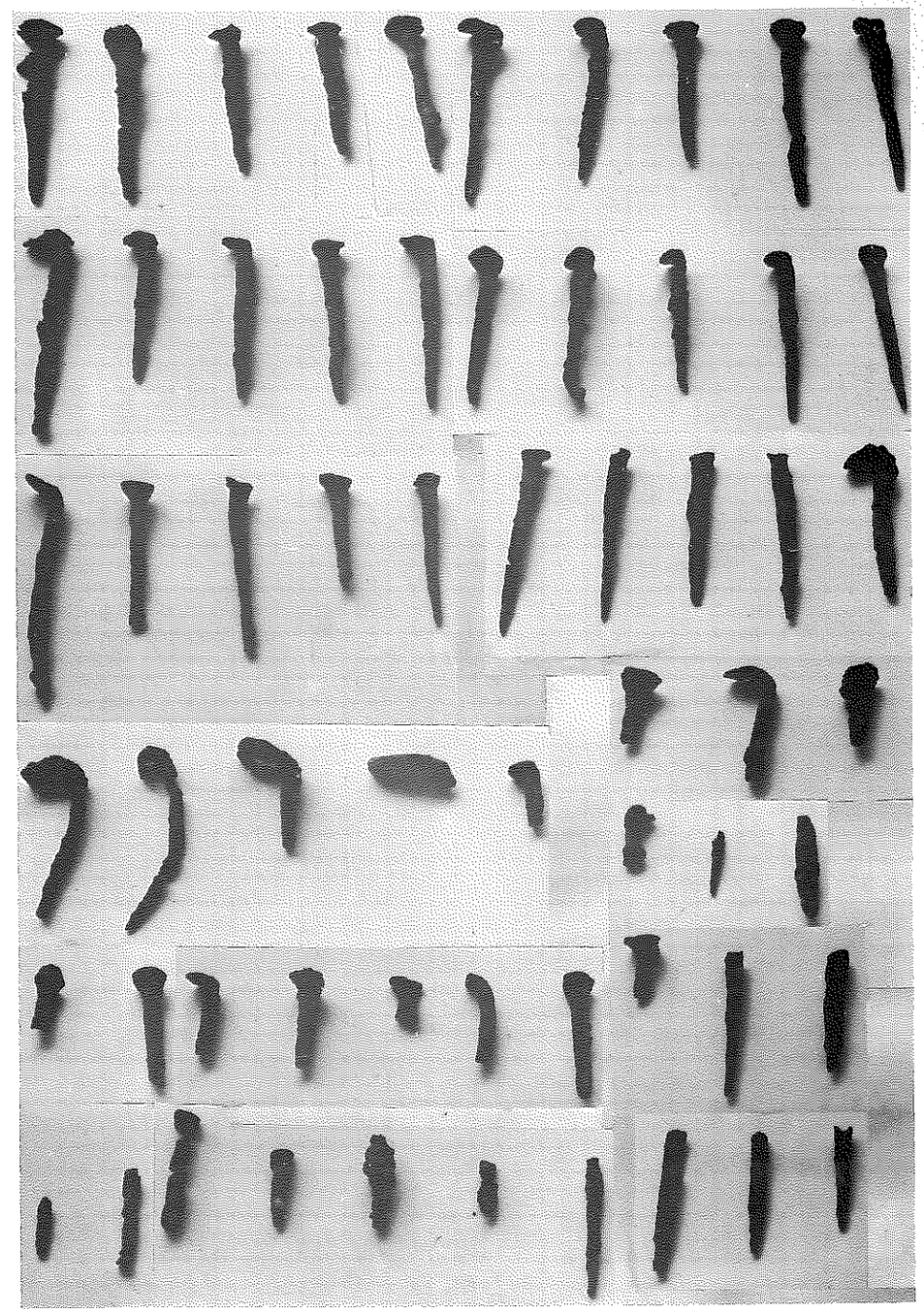
5　12　3　2　9



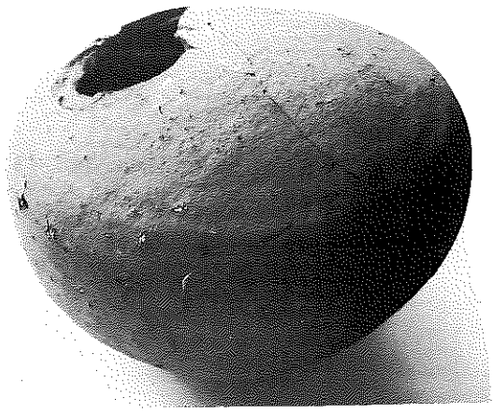
18　17　16　13　4　11

鏃

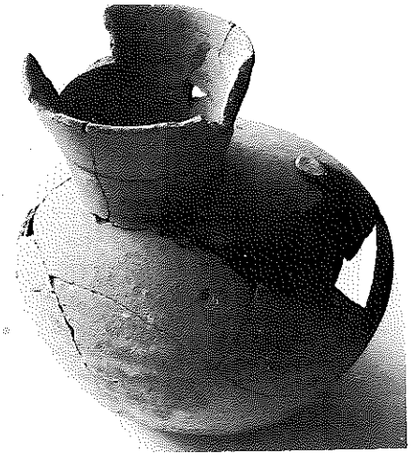
写真 7



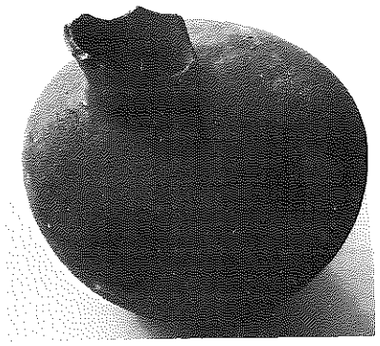
釘



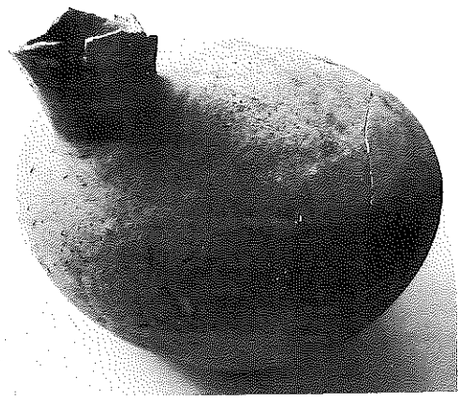
1



2

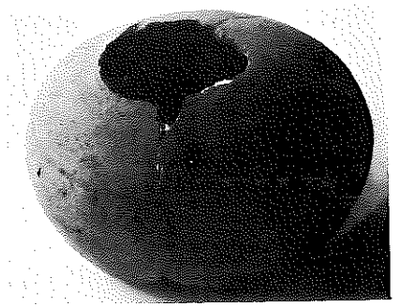


4



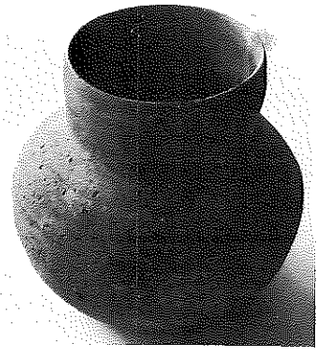
3

5

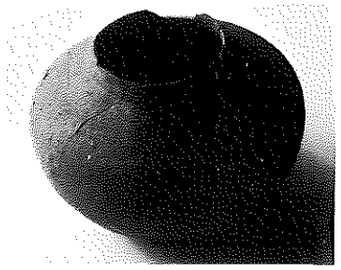


6

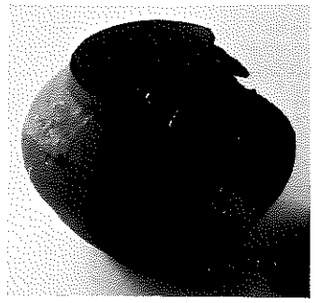
須恵器 1



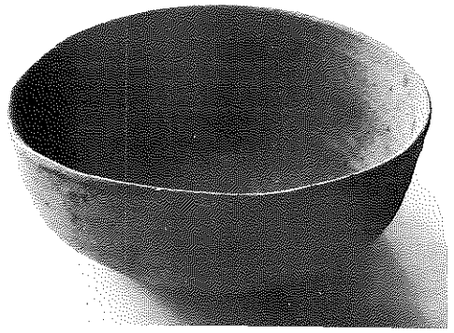
8



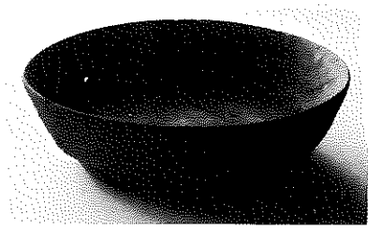
9



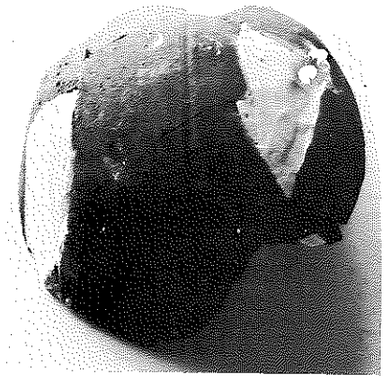
10



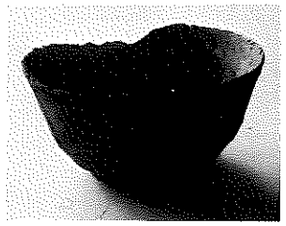
40



41



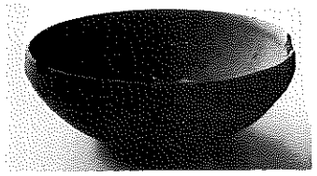
7

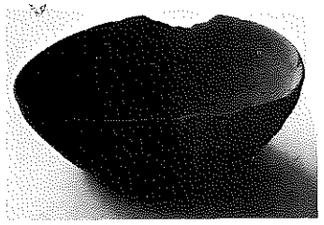


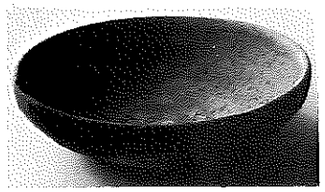
42

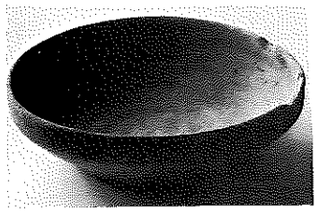
須恵器 2

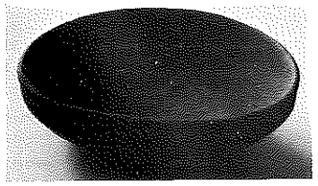
写真 10

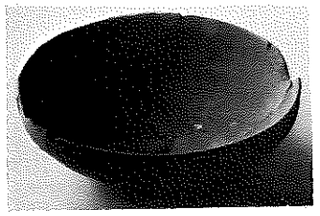

27


28

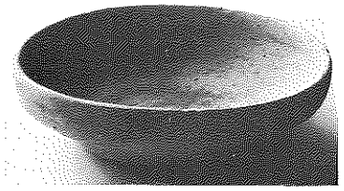

29

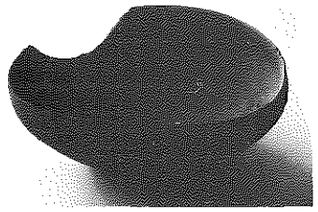

30

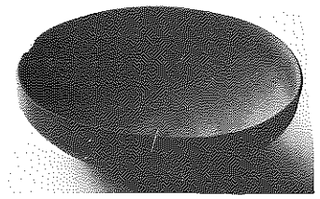

31

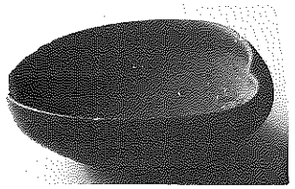

32

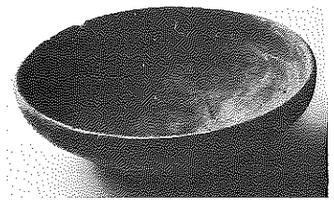
須恵器 3


33


34


35


36


36～37－1

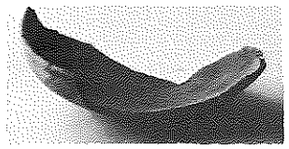
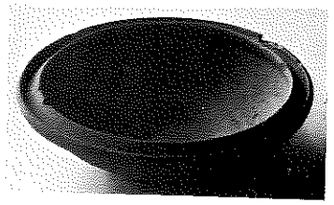
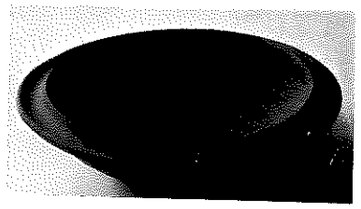
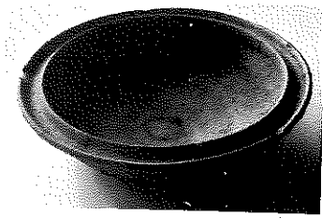

36～37－2

写真 11


39

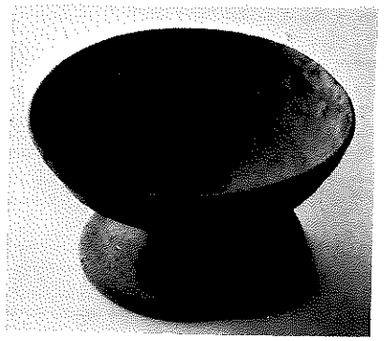

37


38

13

12

11


14

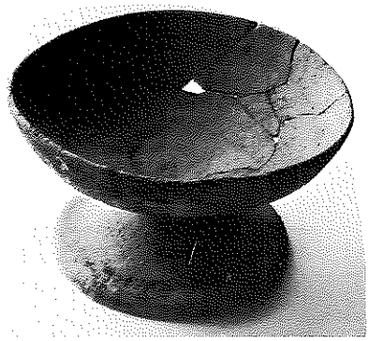
須恵器 4

写真 12

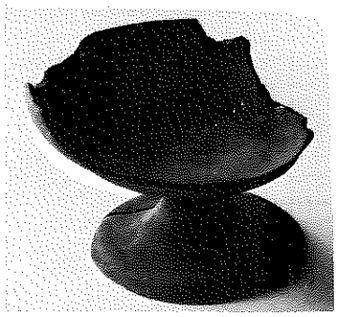
15

20

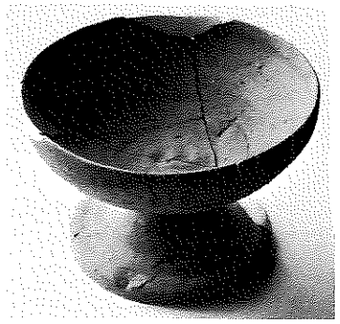
16


17

18

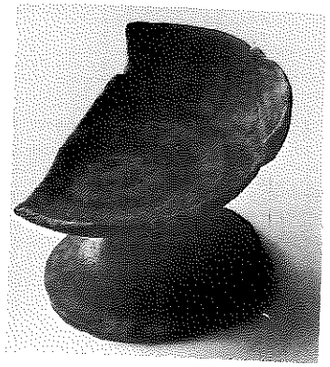

22

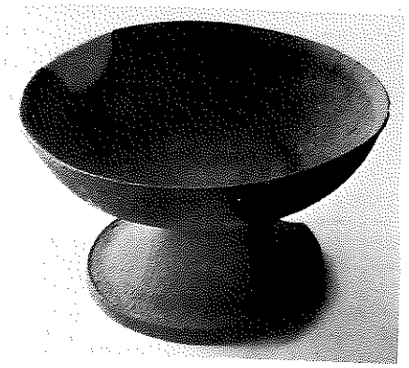
19

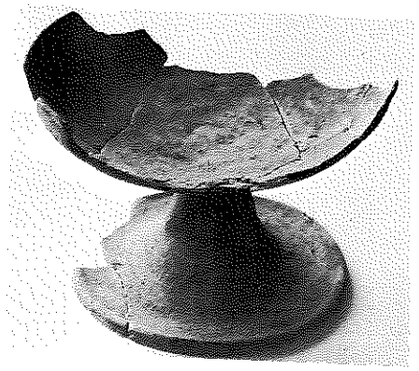

23

須恵器 5

写真 13

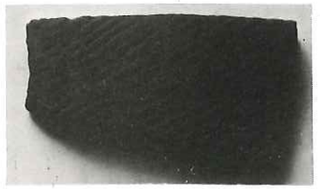

22


25

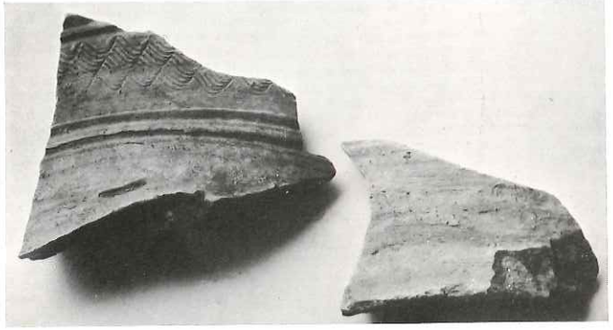

須恵器 6
24

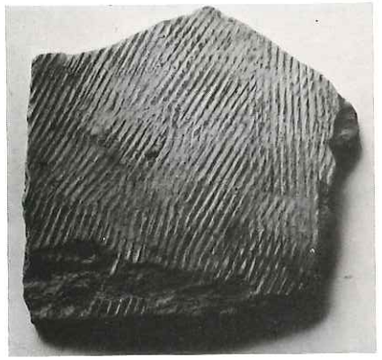
26

写真 14



43





44

須恵器 7

新見市立図書館
14769

円通寺古墳

発 行　1978.3.31

岡山県阿哲郡大佐町小阪部
大佐町教育委員会

印 刷　新見市西方35
ひ ら 印 刷